

## 東夷伝 (6) 韓③辰韓

### I はじめに

弁辰伝と弁韓伝

### II 韓伝弁辰 (辰韓) の条を読む

### III 韓伝弁辰 (辰韓) 条の考古学的アプローチ

### IV おわりに

今後の課題



大竹幸恵氏画  
(2007年)

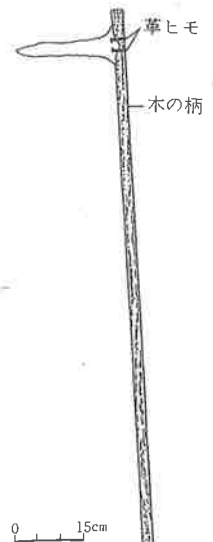


慶州朝陽洞出土鉄戈 (国立中央博物館蔵)



福岡県御床松原遺跡出土鉄戈

鉄戈 鉄戈は銅戈を模倣してつくられたもの。弥生時代中期の北部九州に多数分布する。韓国では、慶州朝陽洞ではじめて発掘された。他に類例のあることから、今後もさらに発見されよう。日韓の鉄文化の系譜関係をかんがえるうえで重要な資料である。



鉄戈の用い方

土地は肥えていて、五穀や稲を植えるのに適し、人々は蚕桑の業に通じて、縑布かとりぎぬを織る。牛や馬に乗ったり車を引かせたりする。婚姻の礼には、男女ではつきりとした区別がある。大きな鳥の羽根を死者に随葬するが、死者に天高く飛んで行かせようと意図してそうするのである。<sup>(二二)</sup>この国は鉄を産し、韓・濊・倭はそれぞれここから鉄を手に入れている。物の交易にはすべて鉄を用いて、ちょうど中国で銭を用いるようであり、またその鉄を楽浪と帶方の二郡にも供給している。人々は歌舞や飲酒がすきで、瑟しつ（大琴）があるが、その形は筑ちくに似て、演奏すればちゃんとした音楽をなす。子供が生まれると、すぐ石でその頭をおさえつけて、扁平へんぺいにしようとする。現在の辰韓の人はみな頭が扁平である。男女の様子は、倭人たちに近く、入れ墨もしている。歩兵戦に巧みで、兵器は馬韓と同じである。風習として道で人に会うと、みな足をとめて道をゆずり合う。

〔一〕『魏略』にいう。確かに彼らが流亡の民であればこそ、馬韓の支配下にあるのである。  
〔二〕『魏略』にいう。その国で建物を作る時には、木材を横につみ重ねて作る。牢獄のよ  
うな格好である。

弁辰は、辰韓の者と住む場所が入りくんでおり、彼らも居住地のまわりに城郭を作る。衣服や住居は辰韓と同じで、言語や掟おきても似ているが、鬼神の祭祀に違いがあり、竈かまどはみな家の西側に置かれる。弁辰のうちの瀆盧国とくろは、倭と境界を接している。十二の国には、さらにそれぞれに王がいる。弁辰の人々の体つきは大がらであり、衣服は清潔で、髪を長くのばしている。また幅の広いきめの細かい布を織る。掟はきびしい。

辰韓は、馬韓の東方に位置する。その地の古老たちが代々いい伝えるところでは、自分たちは古の逃亡者の子孫で、秦の労役をのがれて韓の国へやって来たとき、馬韓がその東部の土地を割いて与えてくれたのだ、とのことである。その居住地のまわりには城壁や柵がめぐらされる。彼らの言葉は馬韓とは異なり、国のことを邦といい、弓のことを弧といい、賊のことを寇といい、行酒（さかずきをまわして順々に酒を飲む）のことを行觴といい、互いに自分たちのことを徒と呼びあうなど、秦の人の言葉と似た点があって、燕や齊の地における物の呼び名と共通点があるというだけに留まらない。楽浪郡の人のことを阿残と呼ぶ。東方の人々は自分のことを阿と呼ぶが、楽浪の人はずっと自分たちの残余だから「阿残」と呼ぶのだという。現在でも彼らのことを秦韓と呼ぶものがある。もともと六国であったが、だんだんと分かれて十二国になった。

弁辰も十二国からなり、さらにいくつかの地方的な小さな中心地があって、それぞれに渠帥（首領）がいる。勢力の大きいものは臣智と呼ばれ、それより一等下って險側、それより下って樊濊、それより下って殺奚、さらにその下に邑借と呼ばれる者がいる。已柢国・不斯国・弁辰弥離弥凍国・弁辰接塗国・勤耆国・難弥離弥凍国・弁辰古資弥凍国・弁辰古淳是国・冉奚国・弁辰半路国・弁辰楽奴国・軍弥国・弁辰弥烏邪馬国・如湛国・弁辰甘路国・戸路国・州鮮国・弁辰狗邪国・弁辰走漕馬国・弁辰安邪国・弁辰瀆盧国・斯盧国・優由国などの国がある。弁韓と辰韓とで合わせて二十四国、大きな国は四、五千家からなり、小さな国は六、七百家からなって、あわせて四、五万戸がある。そのうちの十二国は辰王に属している。辰王の王位は、かつて馬韓の者が即くことになって以来、代々ずっとそのまま来た。辰王の位は「馬韓にかぎられていて、辰韓のものが」自ら王位に即くことはできない。

辰韓在馬韓之東，其耆老傳世，自言古之亡人避秦役來適韓國，馬韓割其東界地與之。有城柵。其言語不與馬韓同，名國爲邦，弓爲弧，賊爲寇，行酒爲行觴。相呼皆爲徒，有似秦人，非但燕、齊之名物也。名樂浪人爲阿殘；東方人名我爲阿，謂樂浪人本其殘餘人。今有名之爲秦韓者。始有六國，稍分爲十二國。

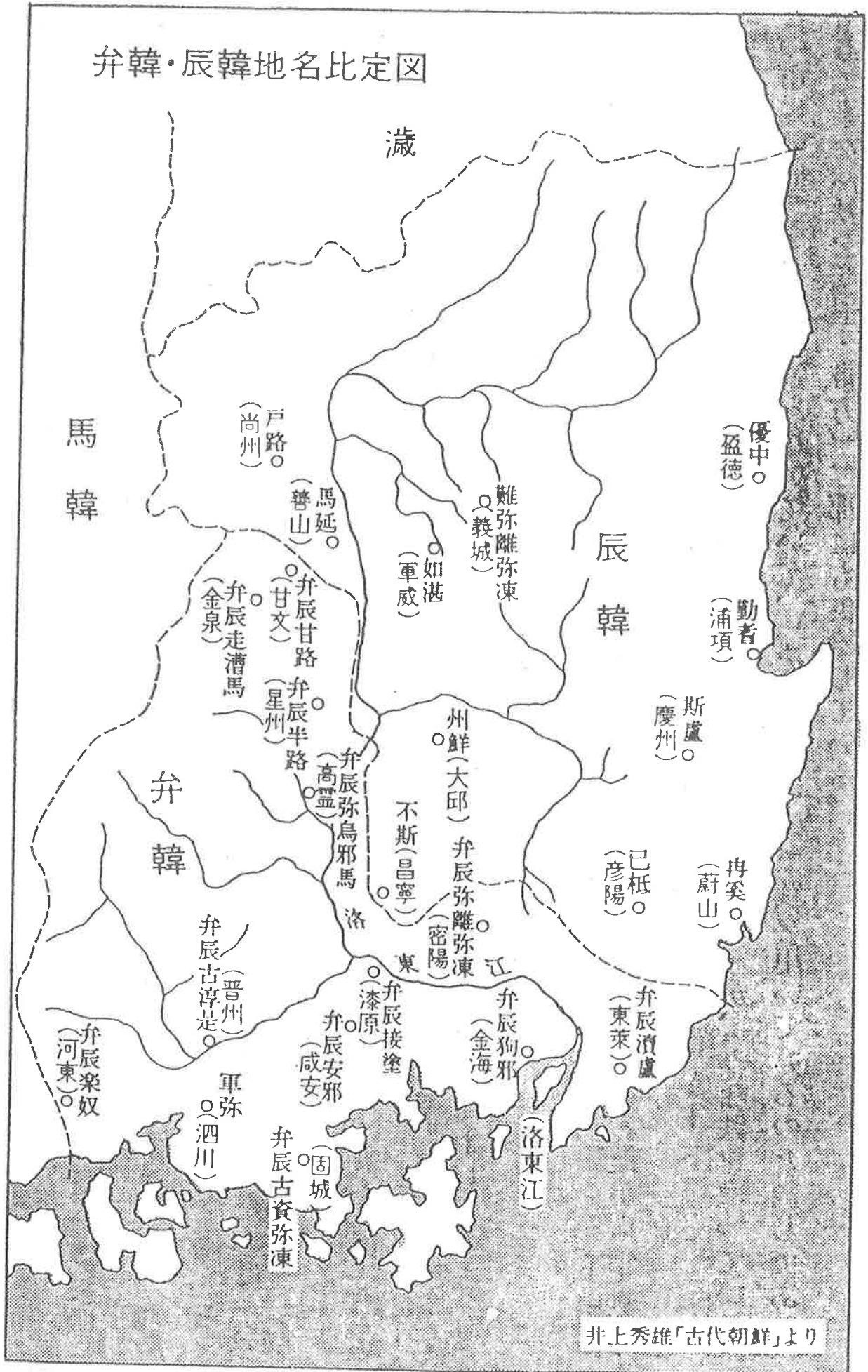
弁辰亦十二國，又有諸小別邑，各有渠帥，大者名臣智，其次有險側，次有樊濊，次有殺奚，次有邑借。有已祗國、不斯國、弁辰彌離彌凍國、弁辰接塗國、勤耆國、難彌離彌凍國、弁辰古資彌凍國、弁辰古淳是國、冉奚國、弁辰半路國、弁辰樂奴國、軍彌國（弁軍彌國）、弁辰彌烏邪馬國、如湛國、弁辰甘路國、戶路國、州鮮國（馬延國）、弁辰狗邪國、弁辰走漕馬國、弁辰安邪國（馬延國）、弁辰瀆盧國、斯盧國、優由國。弁辰韓合二十四國，大國四五千家，小國六七百家，總四五萬戶。其十二國屬辰王。辰王常用馬韓人作之，世世相繼。辰王不得自立爲王。〔一〕土地肥美，宜種五穀及稻，曉蠶桑，作縑布，乘駕牛馬。嫁娶禮俗，男女有別。以大鳥羽送死，其意欲使死者飛揚。〔二〕國出鐵，韓、濊、倭皆從取之。諸市買皆用鐵，如中國用錢，又以供給二郡。俗喜歌舞飲酒。有瑟，其形似筑，彈之亦有音曲。兒生，便以石厭其頭，欲其扁。今辰韓人皆扁頭。男女近倭，亦文身。便步戰，兵仗與馬韓同。其俗，行者相逢，皆住讓路。

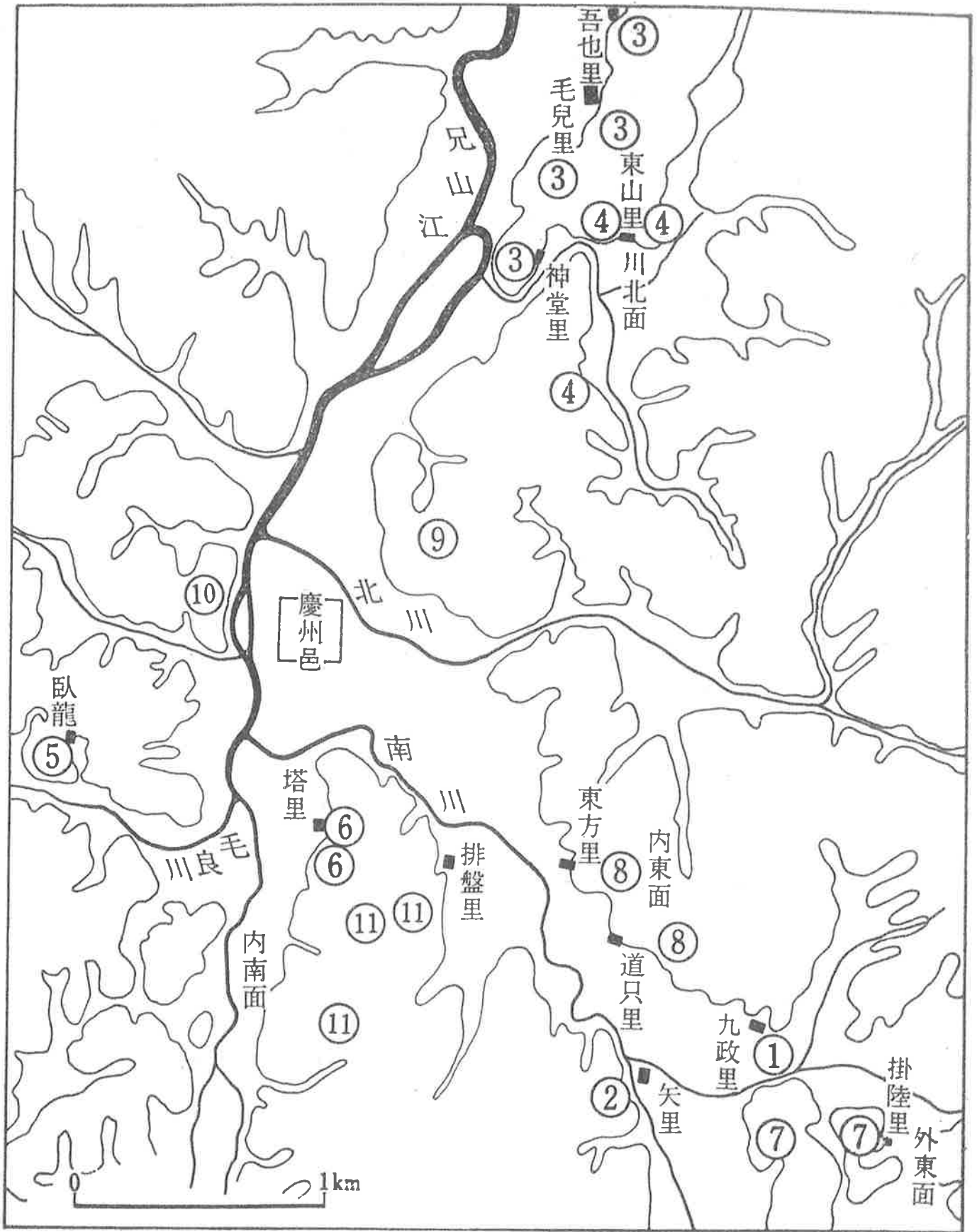
〔一〕魏略曰：明其爲流移之人，故爲馬韓所制。

〔二〕魏略曰：其國作屋，橫累木爲之，有似牢獄也。

弁辰與辰韓雜居，亦有城郭。衣服居處與辰韓同。言語法俗相似，祠祭鬼神有異，施竈皆在戶西。其瀆盧國與倭接界。十二國亦有王，其人形皆大。衣服潔清，長髮。亦作廣幅細布。法俗特嚴峻。

弁韓・辰韓地名比定図

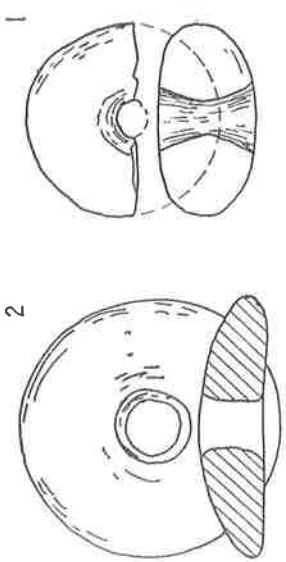
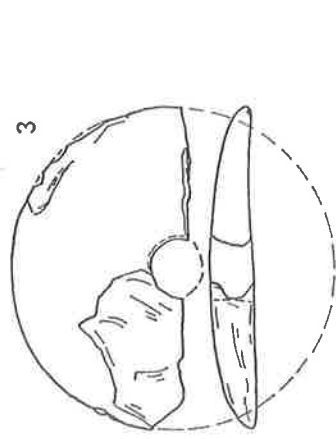
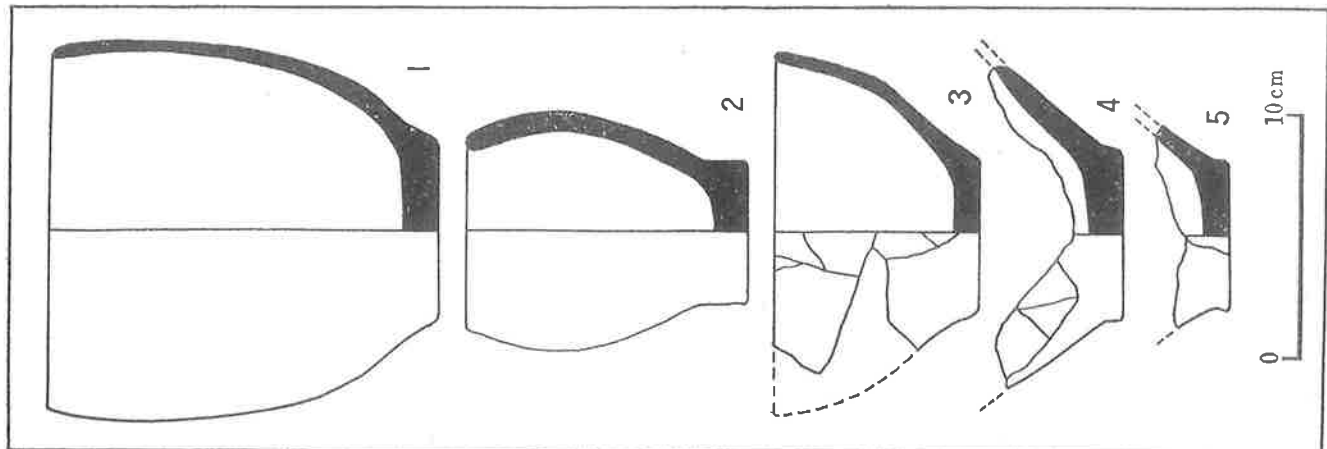
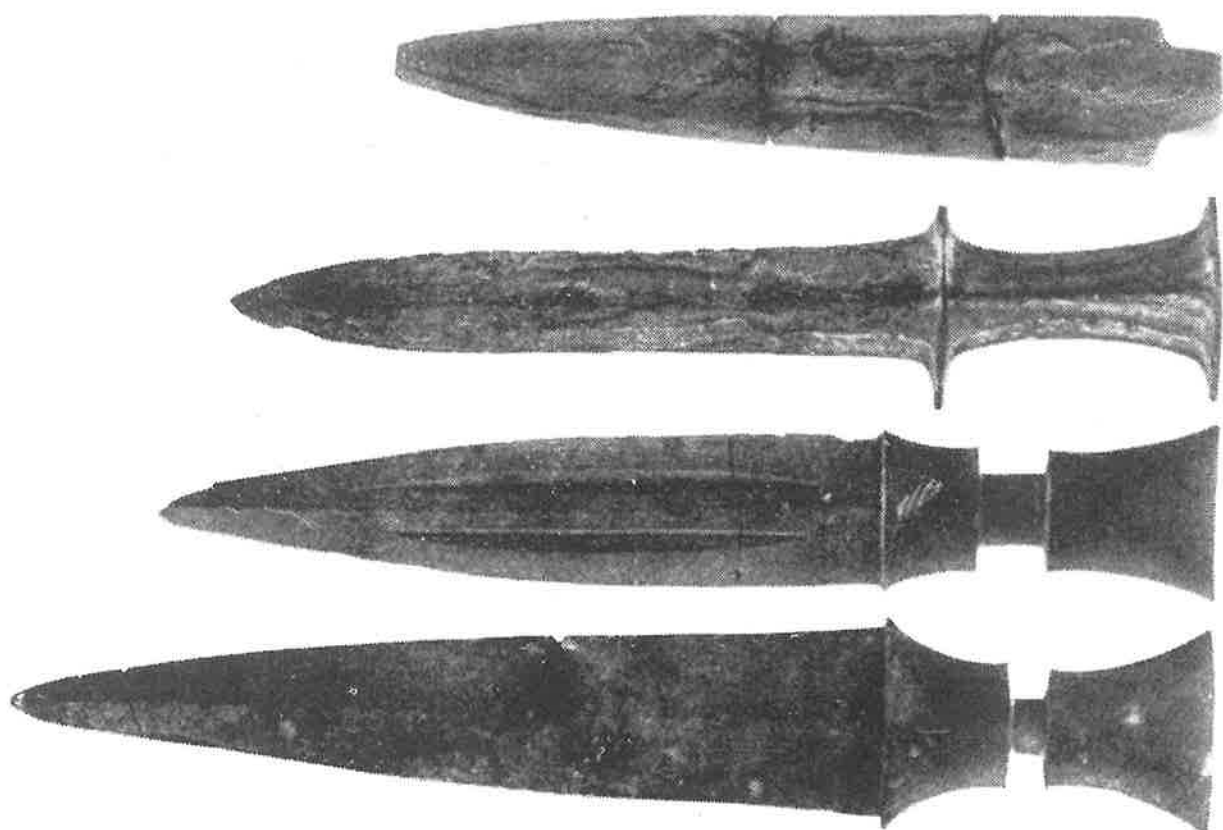


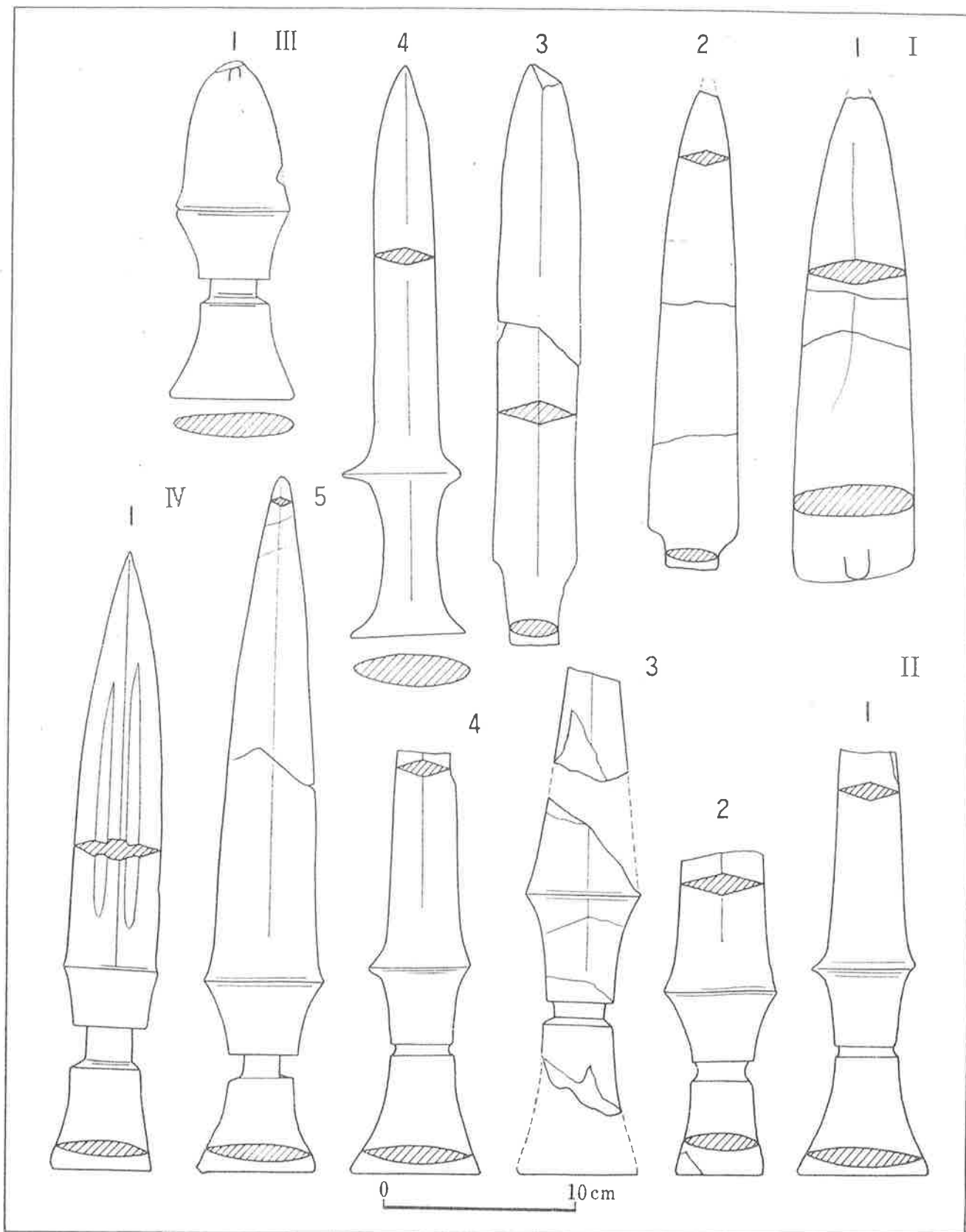


慶州附近略図

斎藤 忠, 1934「慶州附近帯見の磨石器—集成図を中心として—」『考古学』第8巻第7号

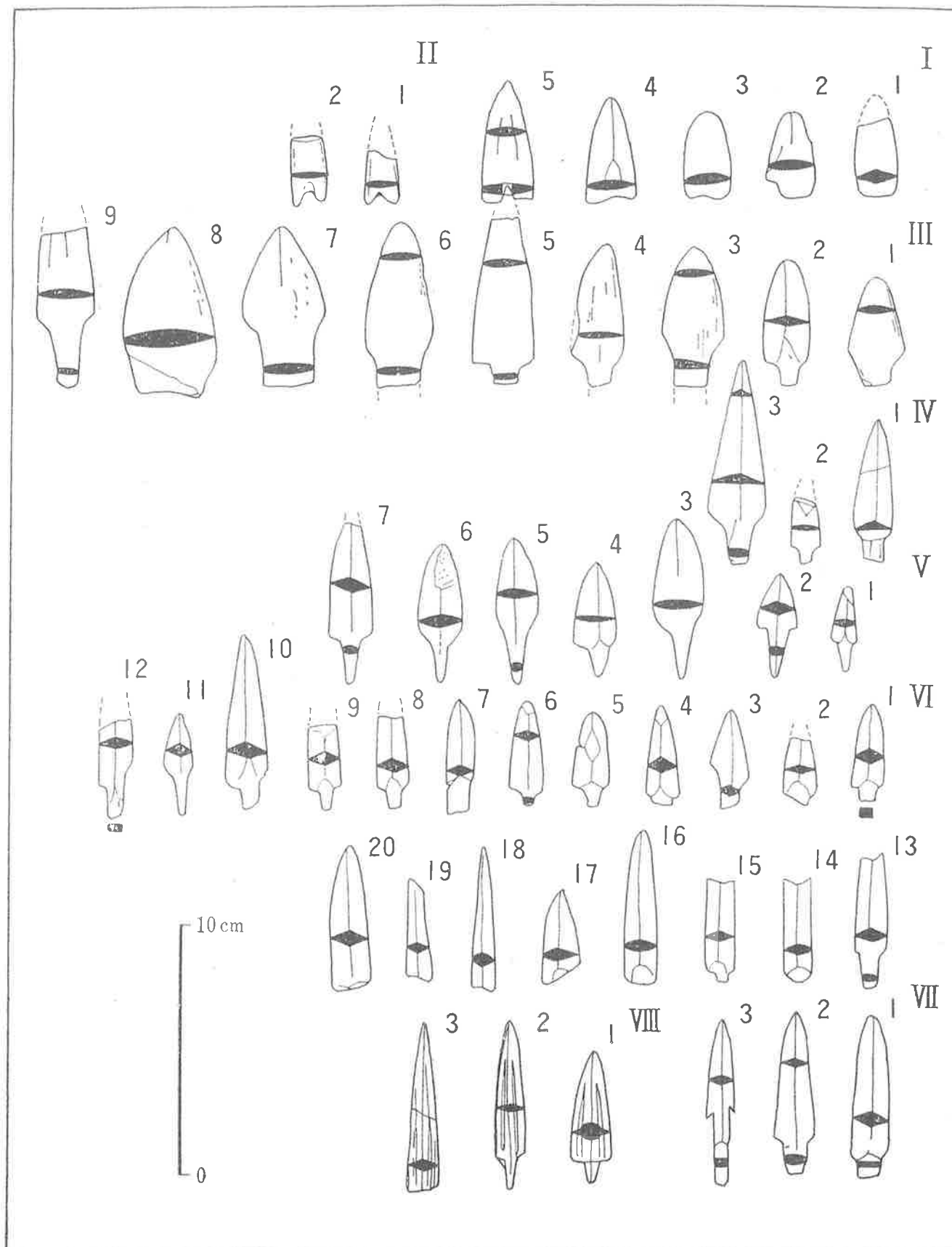
磨製石剣



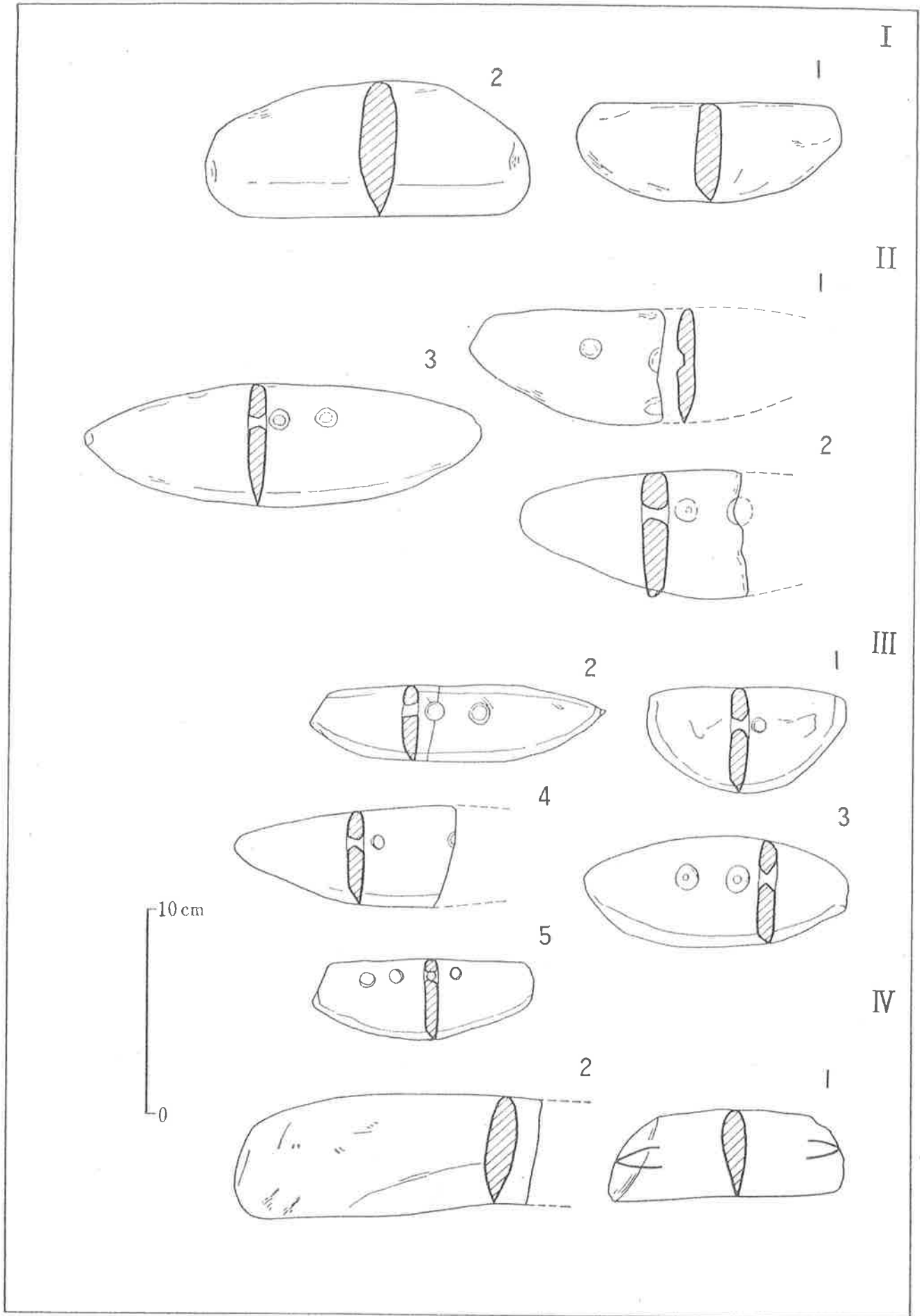


磨製石劍實測圖

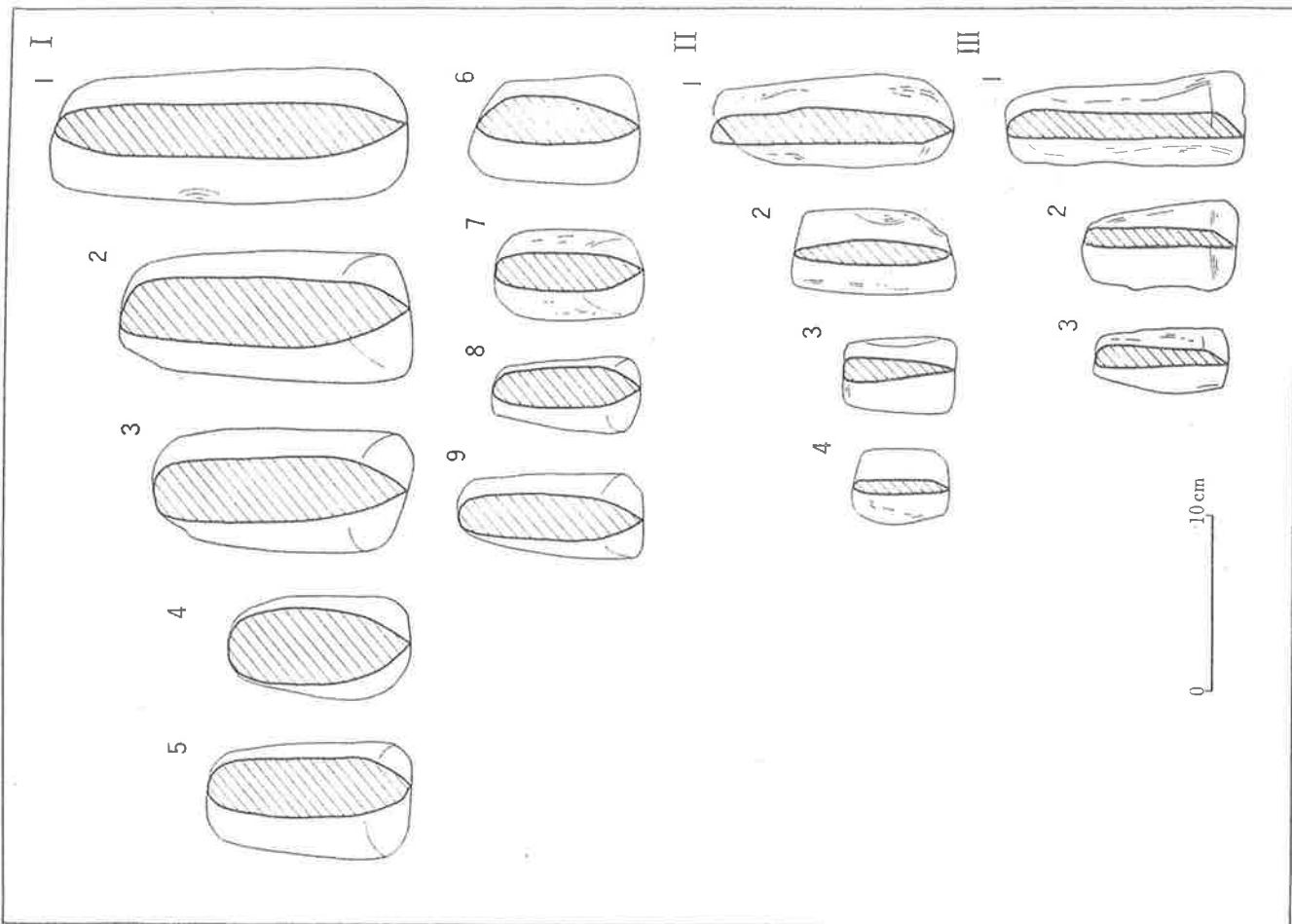




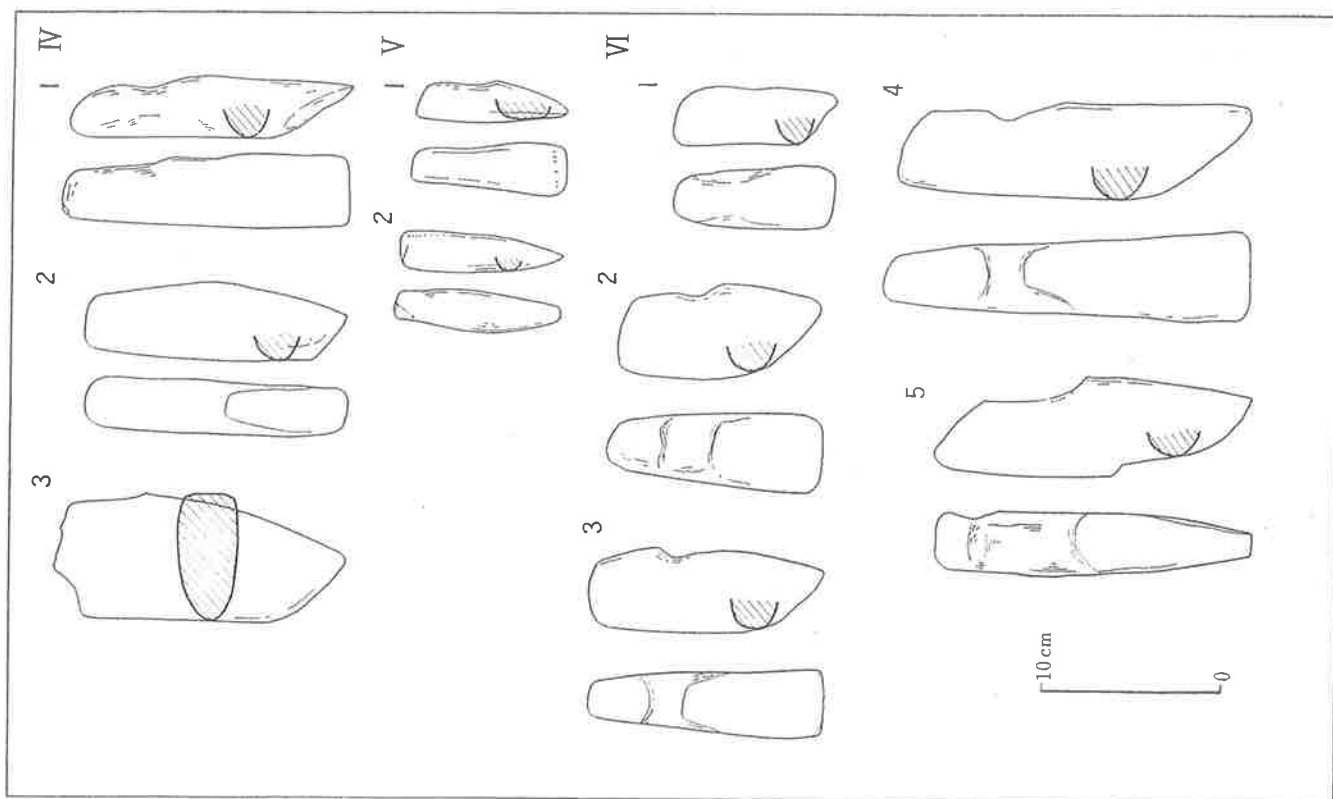
磨製石鏃実測図



石包丁実測図

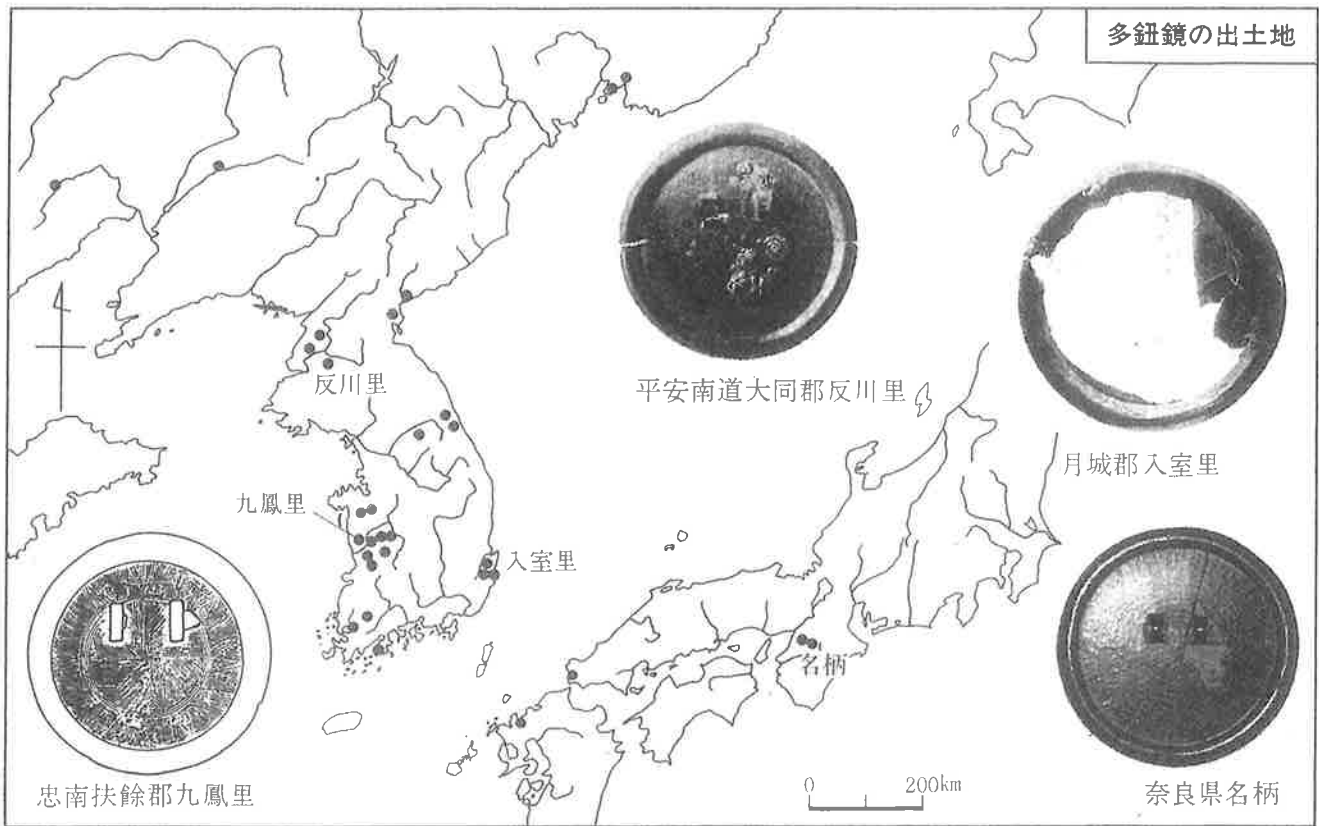


石斧实例图 (1)



石斧实例图 (2)

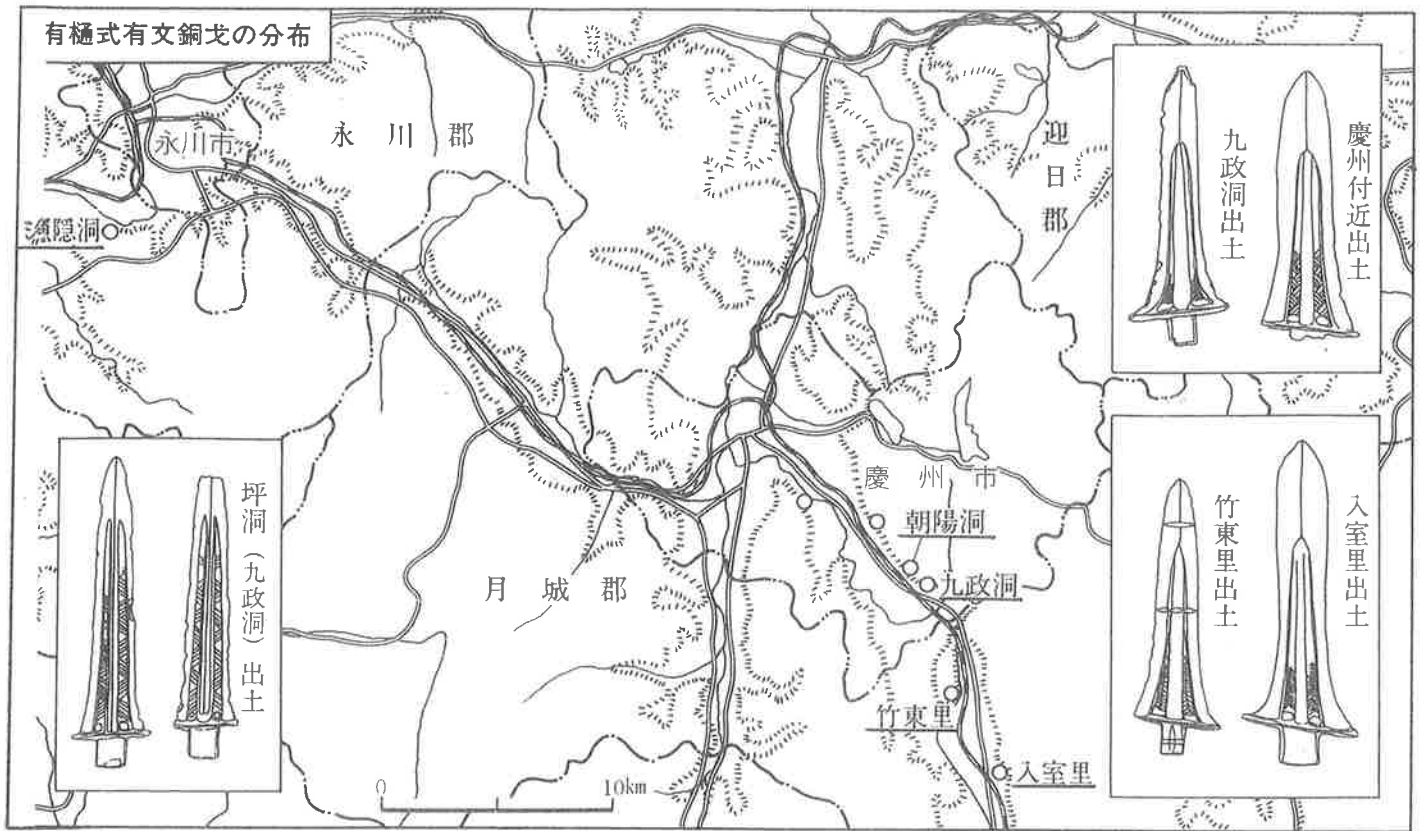
多鈕鏡の出土地



慶州付近の青銅器出土遺跡

遺跡	遺構	時期	出土遺物
慶州市東方洞	包含層	V	銅劍一 石劍一
慶州市排盤洞陵旨		III V	銅劍一 銅矛一 韃金具一
慶州市坪洞			銅劍一 石製把頭飾一
慶州市内			銅斧一
慶州・南山一帯			銅劍一
伝慶州付近			銅劍一 劍把一 韃金具一
慶州市九政洞	土壇墓?	V	銅劍一 銅矛二 銅戈一
慶州市朝陽洞六〇号墓	木棺墓	VI	雙鈴二 小銅鐸一 素環頭太刀一 板狀鉄斧三 柄穴斧一 鉄斧三 鉄鎌一 黑色磨研長頸壺二 無文土器 甕一 銅製馬鐸二 鉄戈一 鑄造斧形品二 多鈕鏡一 青銅製把頭付き鉄劍一 漆塗木製丸棒
慶州市朝陽洞三八号墓	木棺墓	V	前漢鏡四 青銅製把頭付き鉄劍一 土器 鉄斧 板狀鉄斧八 轡一
慶州市塔洞		IV	銅劍六 劍把一 銅矛二 銅戈二 馬鐸五
月城郡外東面入室里	木棺墓?	IV	多鈕鏡一 小銅鐸二 銅棒(古)
月城郡外東面冷川(泉)里		V	一 銅鈴三 小形銅劍(鏃?)一
伝月城郡外東面竹東里		IV	銅製竿頭鈴二 銅製革金具 二五 銅矛一 銅戈一 銅劍一 劍把頭飾二 銅鏃一 小銅鐸一

東潮・田中俊明、1988『韓国の古代遺跡 1 新羅篇(慶州)』中央公論社



小形重圈文日光鏡系仿製鏡 (1・2は漁隠洞、3は二塚山46号甕棺墓出土)

文様の鋳上がり  
の状態から1・  
2・3の順序で  
鋳造されたこと  
がわかる。



内行花文日光鏡 (左) とその仿製鏡 (右、漁隠洞出土)

前漢の日光鏡を手本としてつくられた  
2種の小形仿製鏡は、紀元1世紀後半  
～2世紀前半代(弥生時代後期初め  
～前半)に、慶尚道・対馬・北部九州  
の地域に分布する。その製作地は朝鮮  
南部か北部九州地域と推定される。

		弁韓・辰韓		馬韓	
		慶尚南道	慶尚北道	全羅道	忠清道
I期 (紀元前2世紀後半 ～1世紀前半)		 良洞里70号木棺墓 (東嶽大調査)	 八達洞100号木棺墓 朝陽洞5号木棺墓	 新洞里1号土墳墓	 寬倉里KM-437土墳墓
		 茶戸里58号木棺墓	 0 2m	 0 2m	 0 2m
II期 (紀元前1世紀中葉 ～後半)		 茶戸里1号木棺墓	 朝陽洞38号木棺墓 礼山里31号木棺墓	 草洞ra-A地区18号周溝土墳墓	
		 0 2m		 0 4m	
III期 (1世紀前半 ～中葉)		 茶戸里60号木棺墓	 林堂洞E-118号木棺墓		
		 0 2m			
IV期 (1世紀後半～2世紀中葉)	前半	 茶戸里31号木棺墓	 舍羅里130号木棺墓		
	後半	 良洞里55号木棺墓 (東嶽大調査) 良洞里7号木柳墓 (文化財研究所調査)	 玉城里ka-67号木棺墓 朝陽洞60号木柳墓	 松斗里1号木柳墓	
		 0 2m	 0 2m	 0 2m	
V期 (2世紀後半～3世紀中葉)	前半	 良洞里162号木柳墓 (東嶽大調査)	 下堂ka-43号木柳墓		 清堂洞20号木柳墓
	後半	 良洞里235号木柳墓 (東嶽大調査)	 玉城里na-78号木柳墓	 永登洞1号方形周溝墓	 寬倉里KM-423方形周溝墓
		 0 2m	 0 2m	 0 10m	 0 10m  0 2m

原三国時代における墓制の変遷

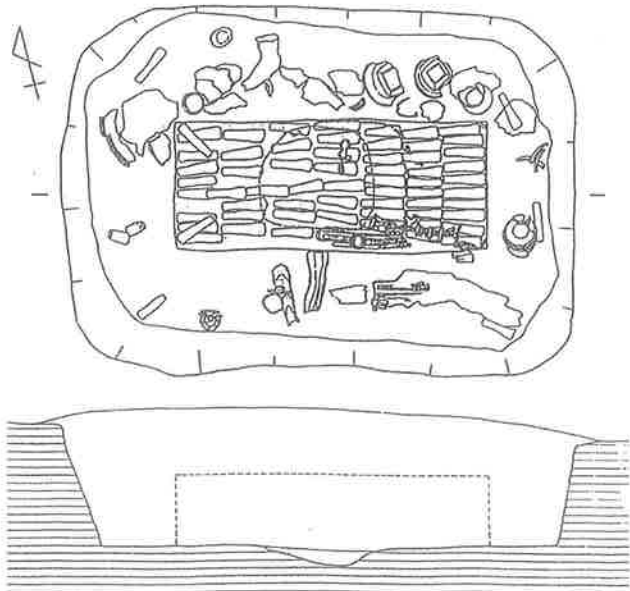
**舍羅里遺跡** しゃらりいせき Sara-ri-yujeok

韓国・慶尚北道慶州市西面舍羅里の標高40~100mの丘陵地に位置する墳墓遺跡。工場建設に伴い1995・96年にかけて、嶺南文化財研究院が発掘調査した。その結果、無文土器（青銅器）時代の竪穴住居跡5軒、原三国（辰韓）時代の木棺墓7基、三国時代新羅の木槨墓67基、積石木槨墓43基、石槨墓12基、甕棺墓2基など、多種多様な遺構136基が検出された。そのうち、原三国時代の舍羅里130号木棺墓において確認された銅剣・仿製鏡・虎形帯鉤・鉄鍔・板状鉄斧などの一括遺物は、辰韓の基準資料として注目される。また、慶州西部地域一帯の大規模墳墓群の一つとして、新羅国家の形成過程や構造を考える上で、貴重な墳墓資料を提供したといえる。〔文献〕嶺南文化財研究院『慶州舍羅里遺蹟Ⅰ—積石木槨墓・石槨墓—』嶺南文化財研究院学術調査報告19, 1999。 (西谷 正)

**舍羅里130号墳** しゃらり130ごうふん

Sara-ri-130 (baeksamsip) ho-bun

韓国・慶尚北道慶州市西面舍羅里に所在する原三国（辰韓）時代の大型木棺墓。舍羅里遺跡は、低丘陵上に位置する無文土器（青銅器）時代~三国時代の複合遺跡である。1995年の嶺南文化財研究院による発掘調査で、無文土器時代の住居跡、原三国時代の木棺墓、三国時代の木槨墓・積石木槨墓・石槨墓・甕棺墓などが確認されている。130号墳は同時に調査された7基の木棺墓のうち最大規模のものである。大型の長方形墓壙（325×225cm）のほぼ中央に、木棺（205×80cm）を埋葬しており、墓壙中央部に腰坑（74×60cm、深さ15cm）を設置している。木棺内には鉄剣・銅釧や虎形帯鉤などの装身具類、仿製鏡が副葬され、東南隅には細形銅剣が突き立てられていた。さらに、木棺床面には63枚の板状鉄斧が7列に敷き詰められていた。木棺と墓壙の間には鉄斧・鉄剣・鉄鍔・仿製鏡・土器類と多数の漆器類が副葬されており、墓壙上端から鉄鍔が、そして、木棺上部の封土内からS字形鑣付轡などの馬具類が出土した。造営年代はAD1世紀後半と推定されている。〔文献〕朴升圭ほか『慶州舍羅里遺蹟Ⅱ—木棺墓、住居址』嶺南文化財研究院学術調査報告書32, 2001。 (高久健二)

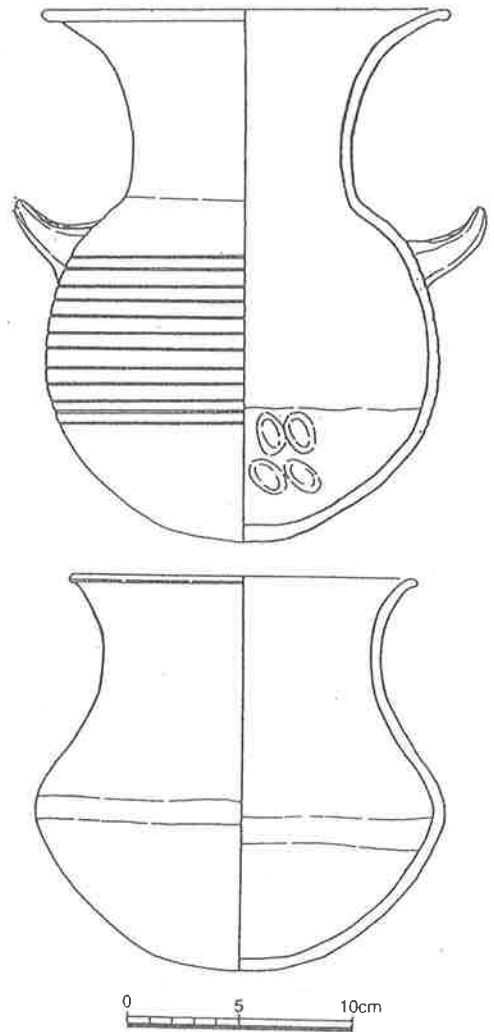


舍羅里130号墳 埋葬主体部

0 1m

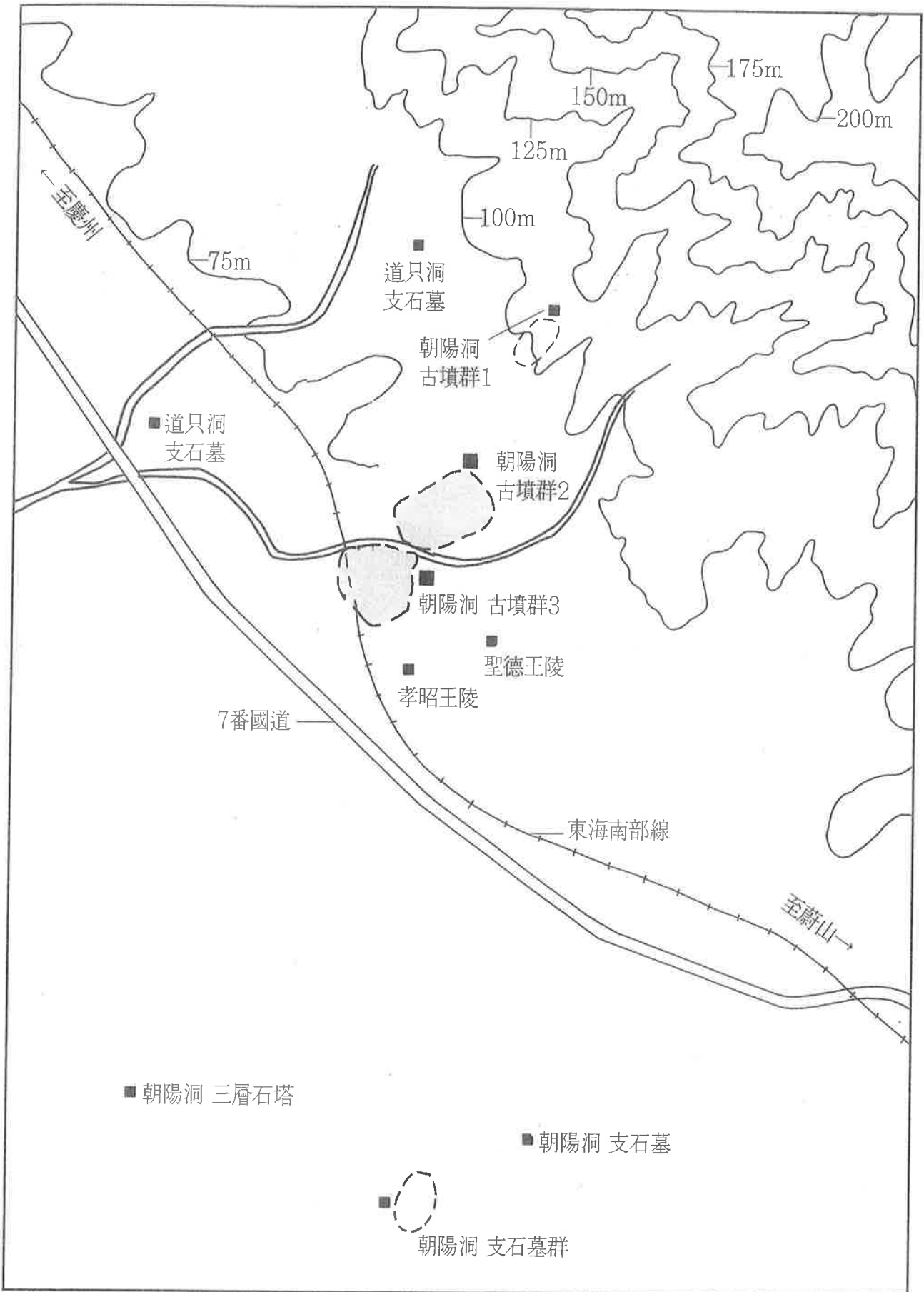
**朝陽洞遺跡** ちょうようどういせき Joyang-dong-yujeok

韓国・慶尚北道慶州市朝陽洞の低丘陵上に位置する原三国（辰韓）~三国時代の墳墓群。1979~81年に国立慶州博物館によって木棺墓26基、木槨墓13基、甕棺墓20基、石槨墓8基が発掘調査された。このうち最も古式の5号墳は、細長方形の墓壙（200×75cm）内に木棺（140×50cm）を埋葬したものであり、木棺内に多鈕無文鏡・青銅製把頭飾付鉄短剣・漆塗木製丸棒が、木棺と墓壙の間に黒色磨研長頸壺・無文土器の甕・青銅馬鐸・鉄戈・鑄造鉄斧などが副葬されていた。造営年代はBC1世紀前半代と推定され、朝陽洞墳墓群の上限を示している。また、38号墳も隅丸長方形の墓壙をもつ木棺墓であるが、木棺内から青銅製劍把頭飾付鉄短剣とともに、内行花文日光鏡・重圈文日光鏡・昭明鏡・四乳鏡などの前漢鏡が出土した。いずれもBC1世紀後半代の前漢鏡であり、当時の楽浪郡と辰韓との交渉を示す遺物である。〔文献〕崔鍾圭「慶州市朝陽洞遺蹟発掘調査概要とその成果」古代文化35-8, 1983。国立慶州博物館『慶州朝陽洞遺蹟』Ⅰ・Ⅱ, 学術調査報告書11・13, 2000・03。 (高久健二)



慶州 舍羅里遺蹟 130號墓 出土遺物

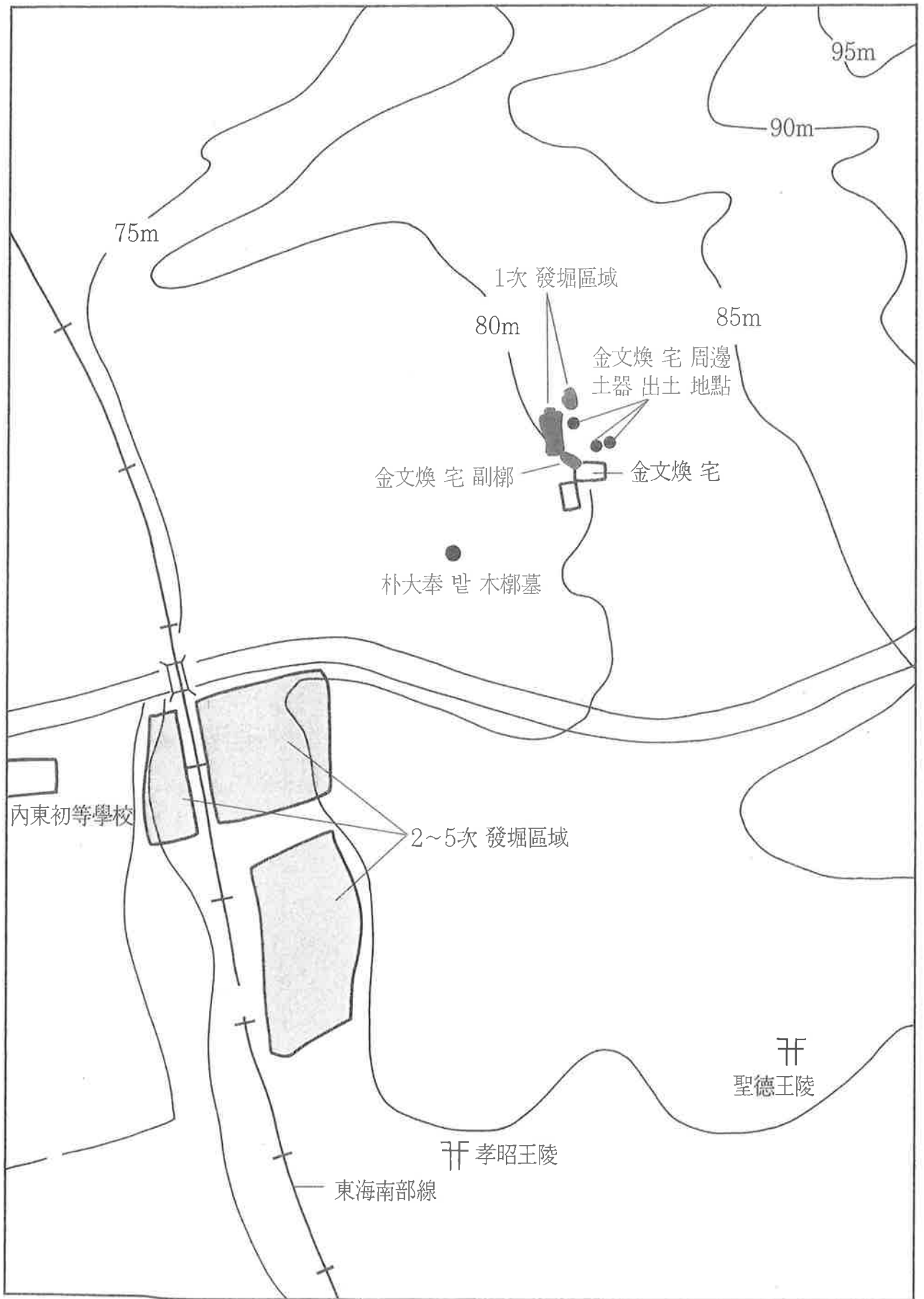
西谷 正, 2007『東アジア考古学辞典』東京堂出版



周邊 遺蹟 位置圖

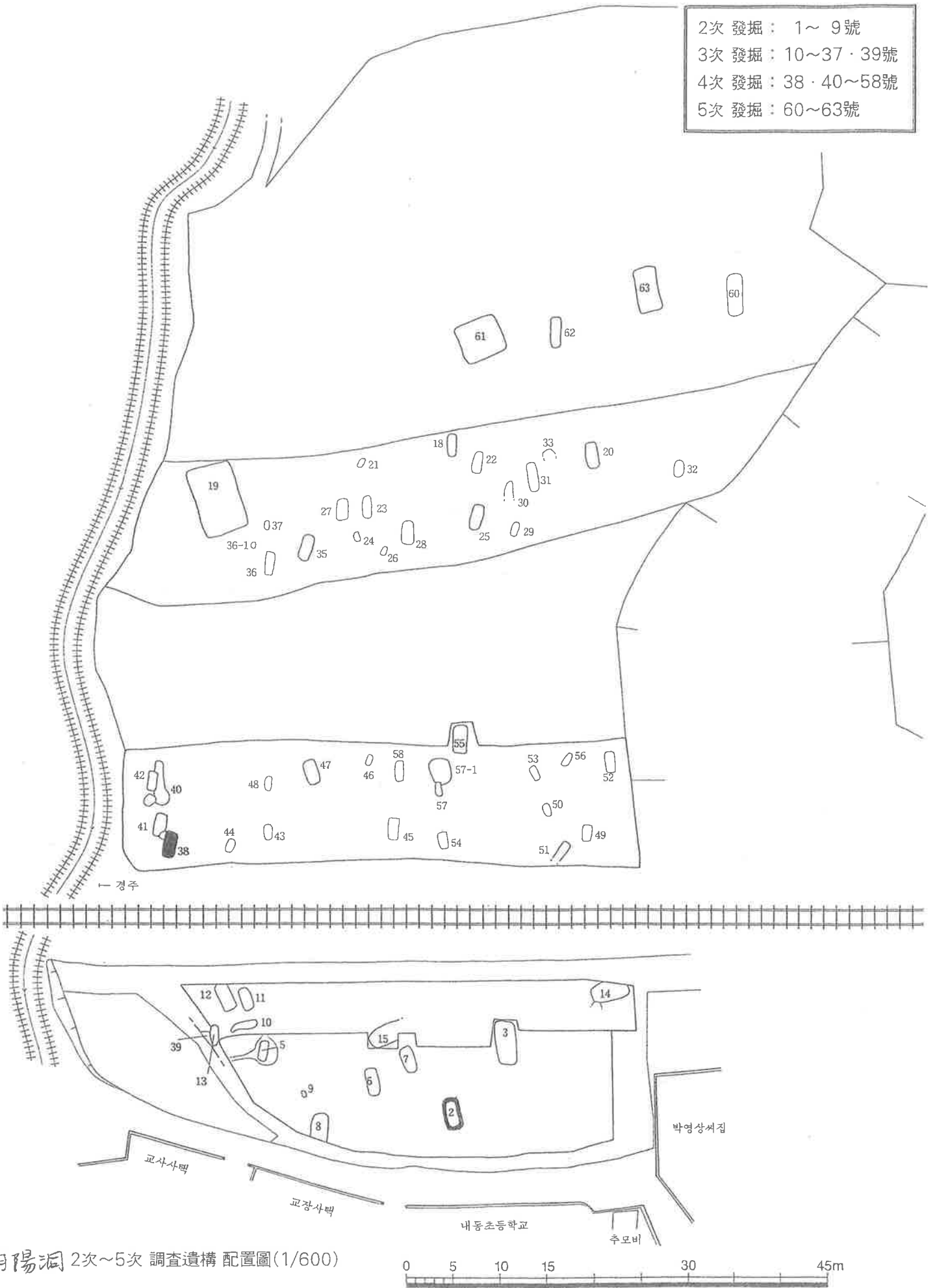
國立慶州博物館, 2000 『慶州朝陽洞遺蹟 I』, 『國立慶州博物館 文化調查報告』第11冊



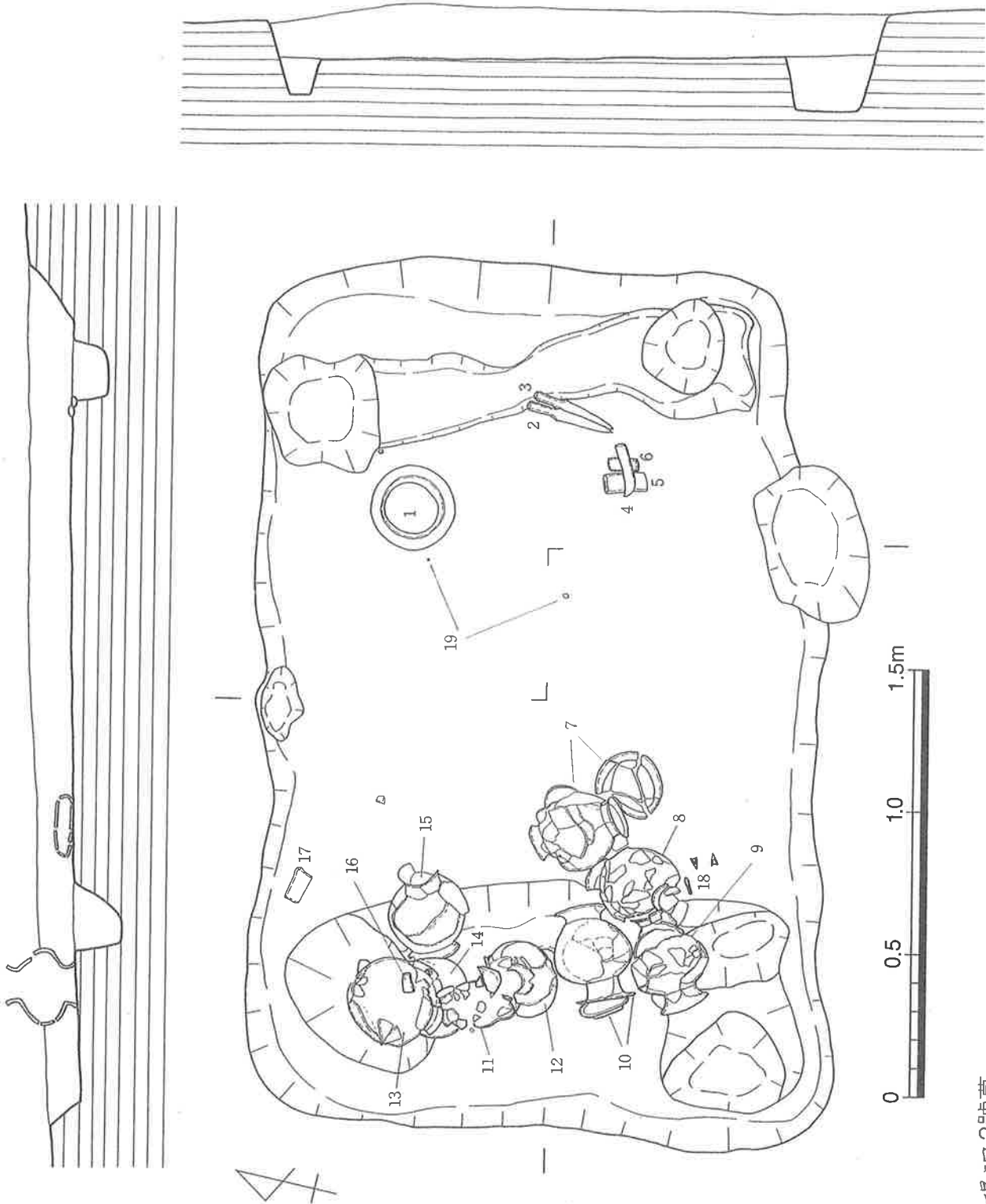


調查地點位置圖

2次發掘：1~9號  
 3次發掘：10~37·39號  
 4次發掘：38·40~58號  
 5次發掘：60~63號

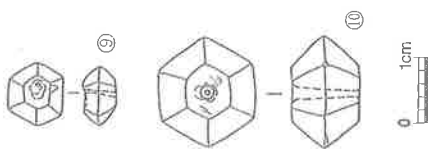
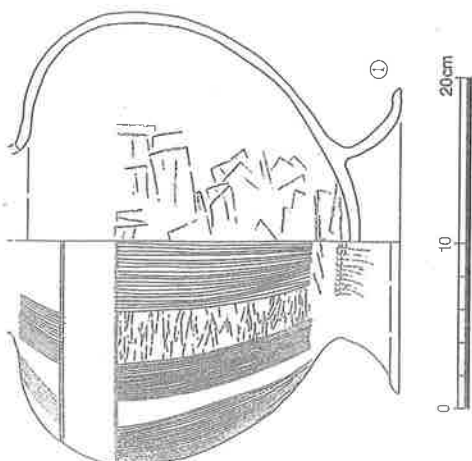
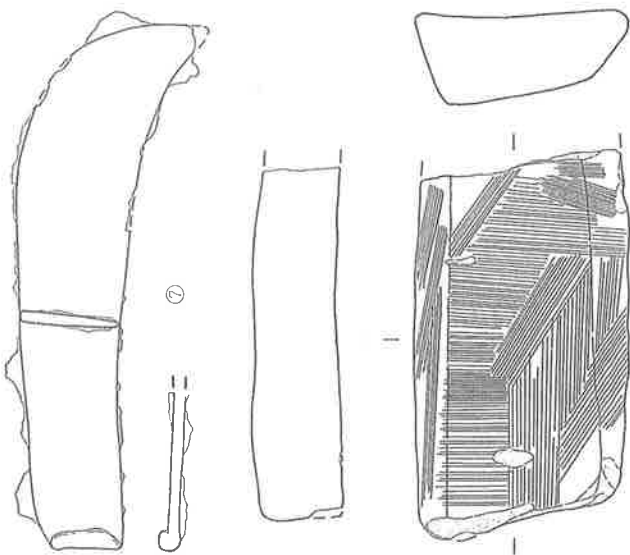
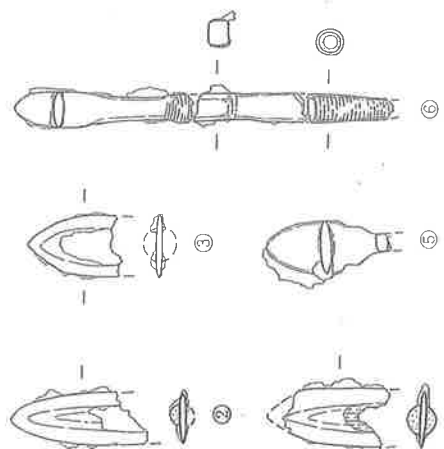
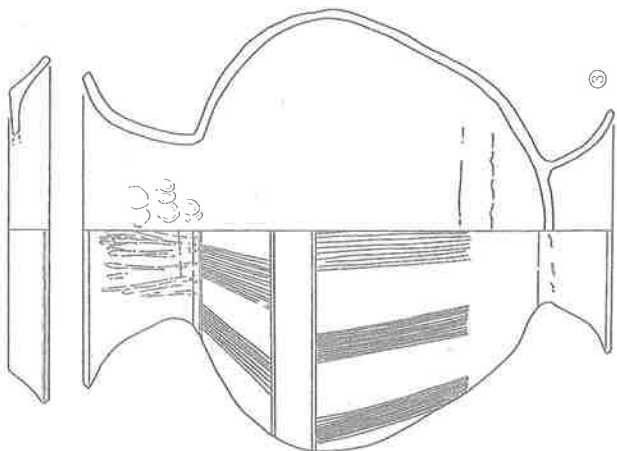
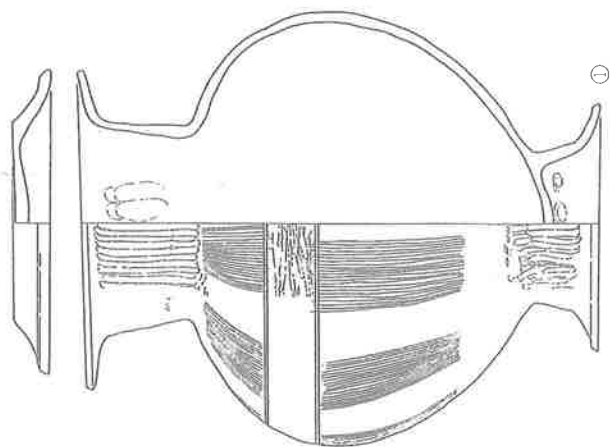
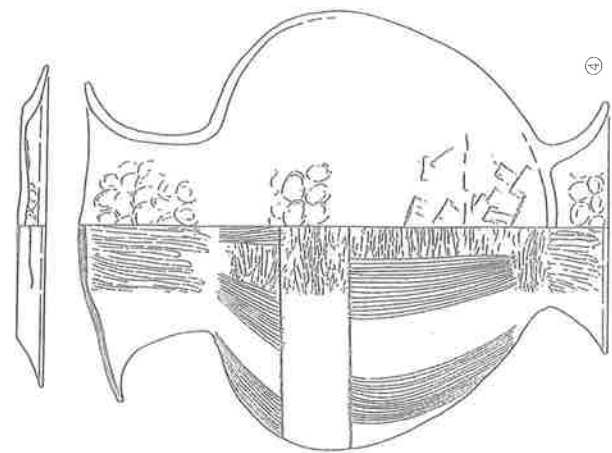
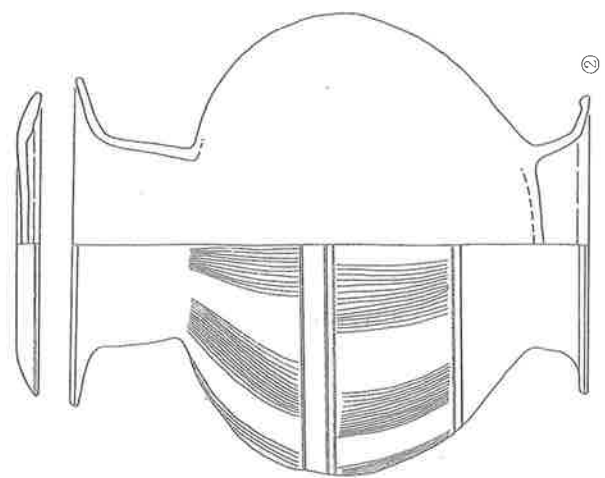


朝陽洞 2次~5次 調査遺構 配置圖(1/600)

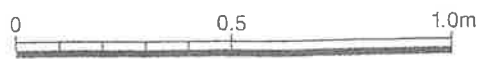
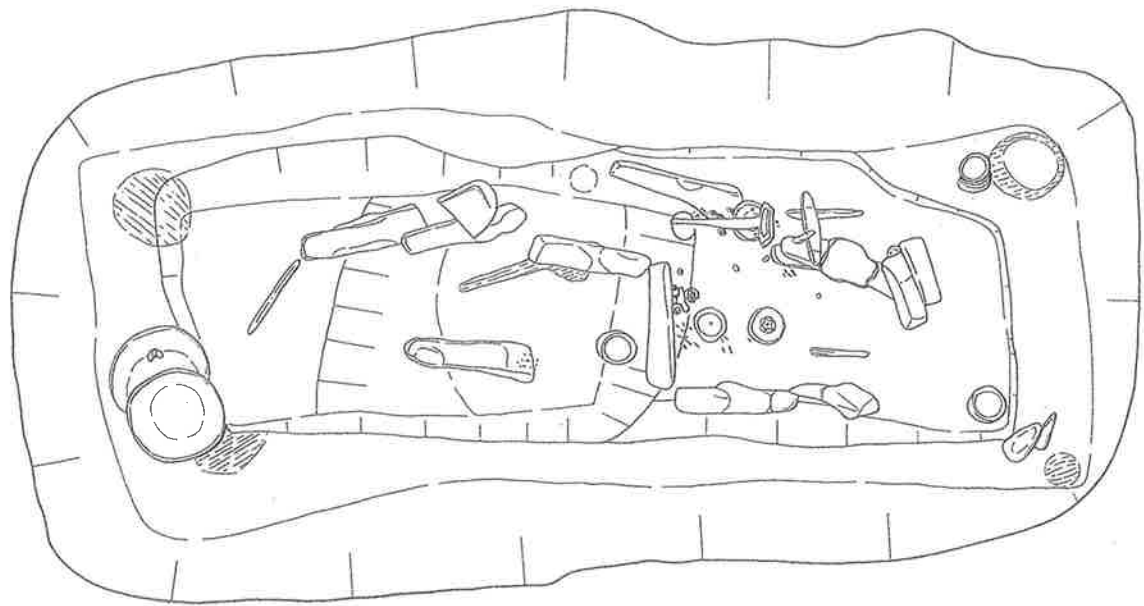
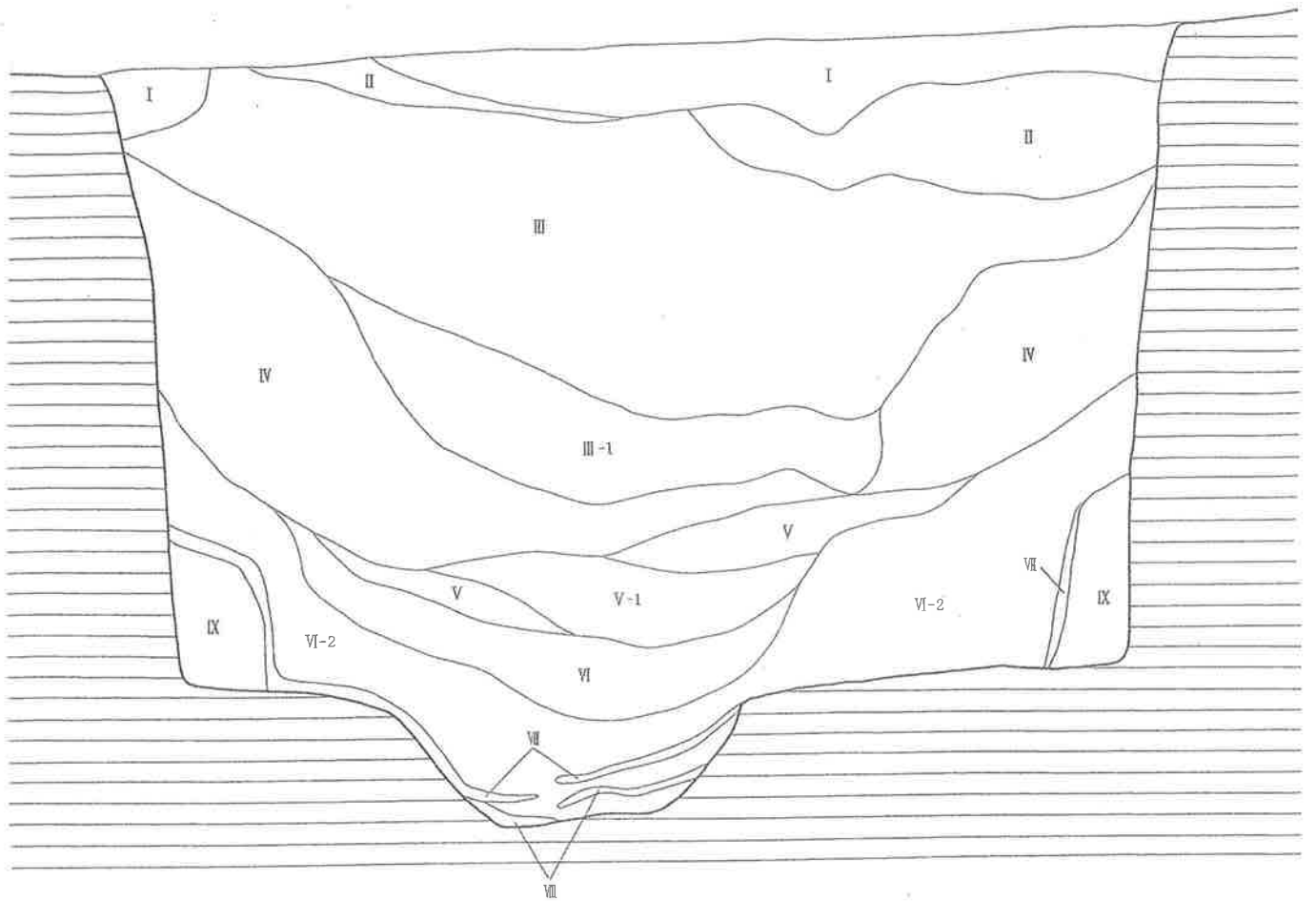


朝陽洞2號墓

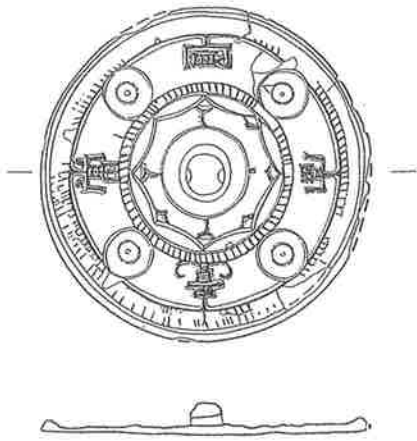
國立廣州博物館, 2003『廣州朝陽洞遺蹟 II—是是—』國立廣州博物館 學術調查報告 第3冊



朝陽洞乙号墓



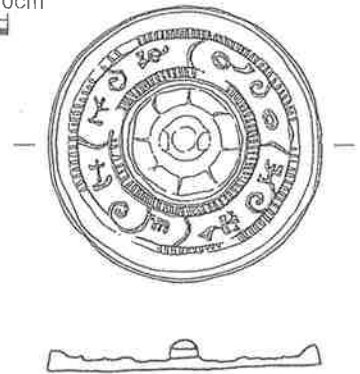
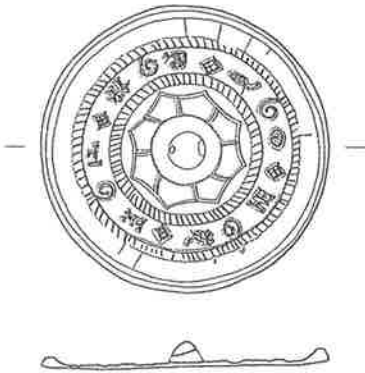
朝陽洞 38號墓



①



②

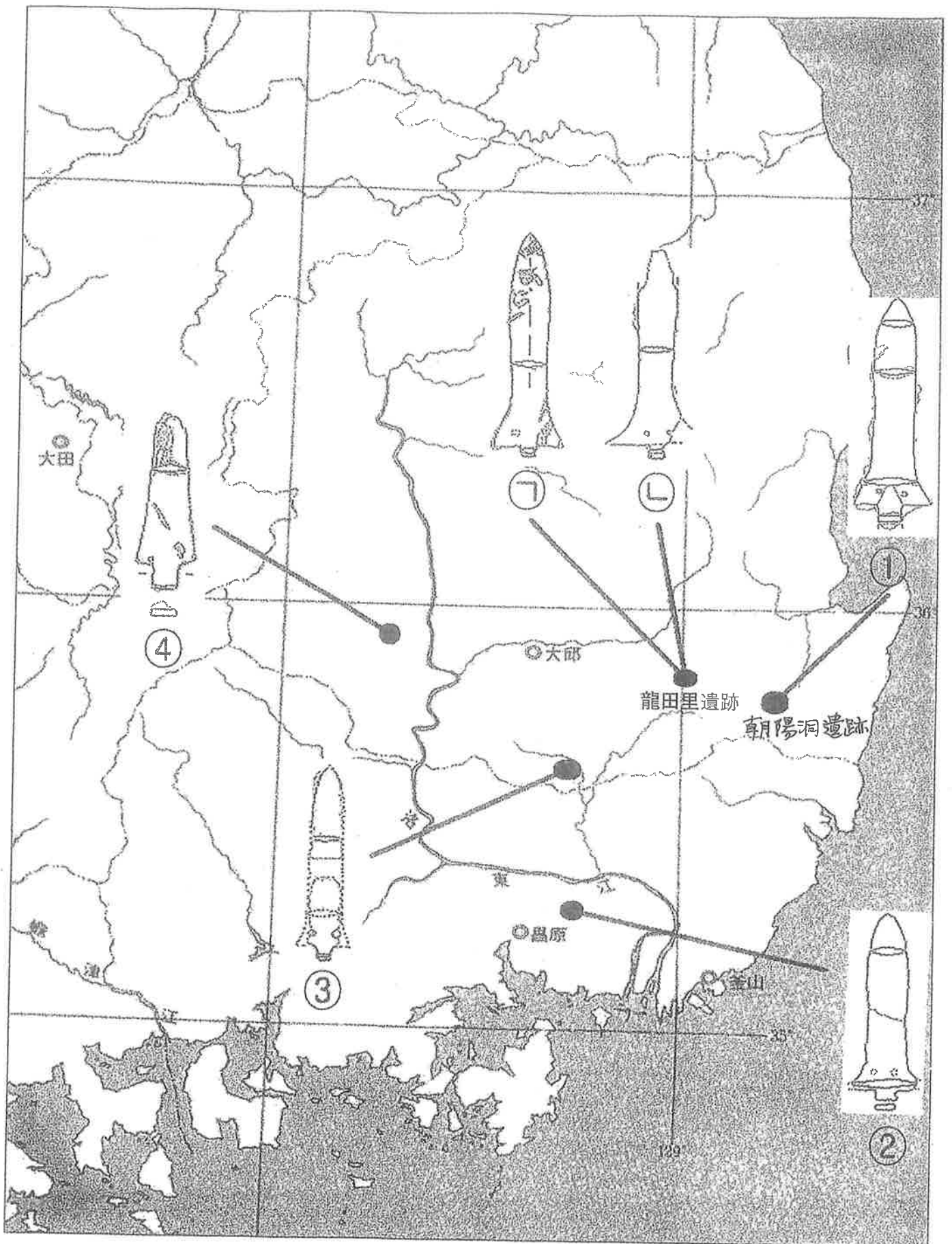


③

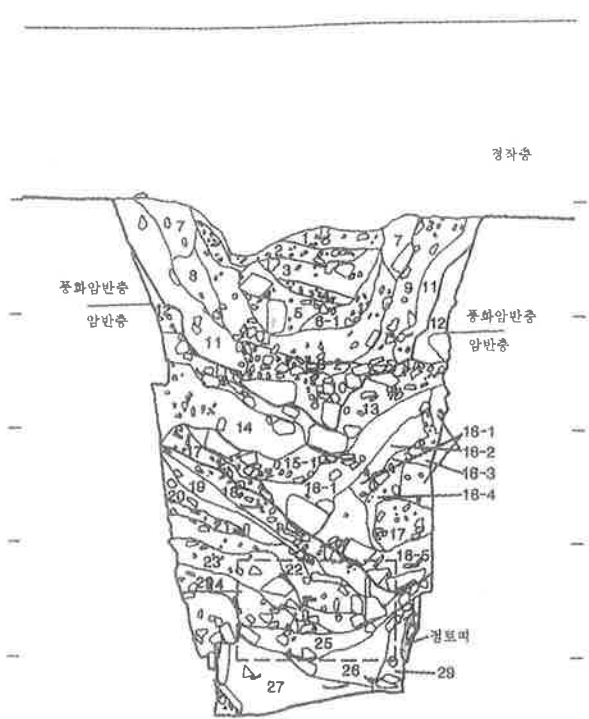


④

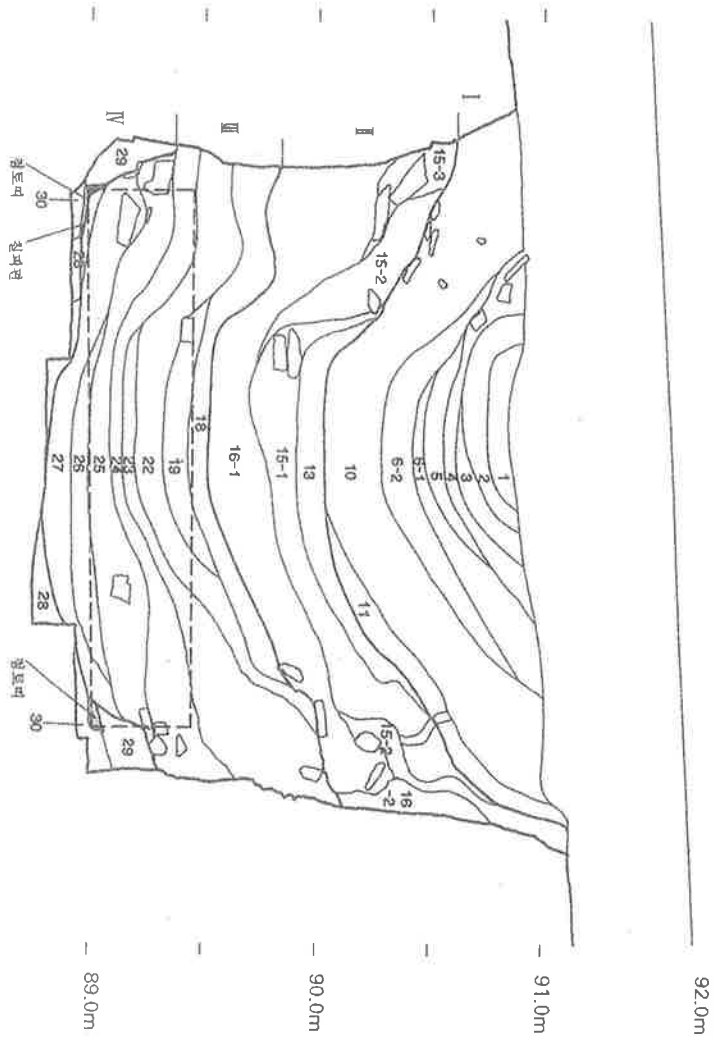
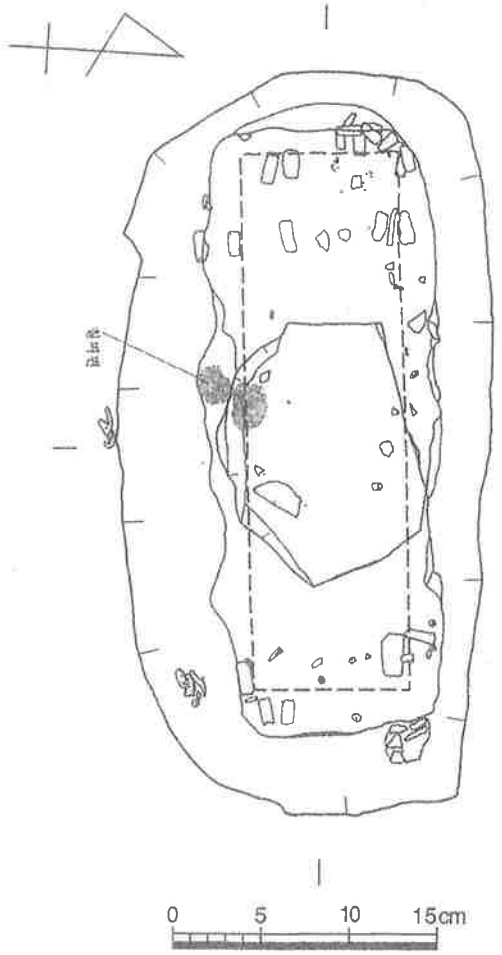
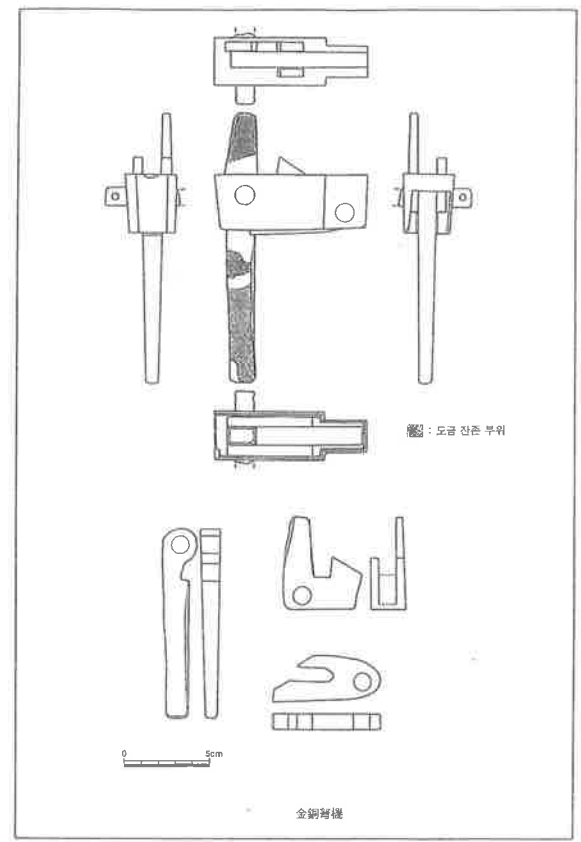
朝陽洞 38號墓 出土 銅鏡



龍田里遺跡の位置と鉄戈分布図 (①②は龍田里遺跡)



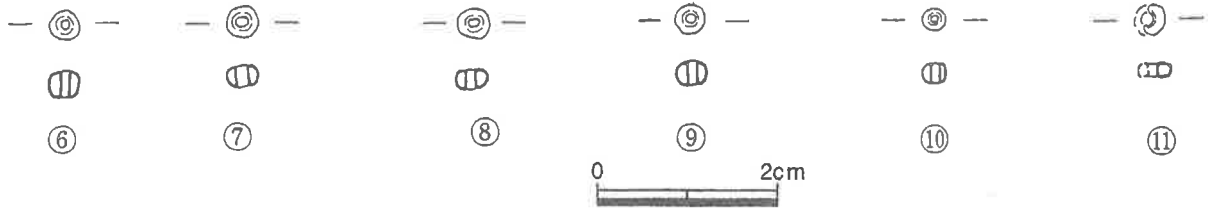
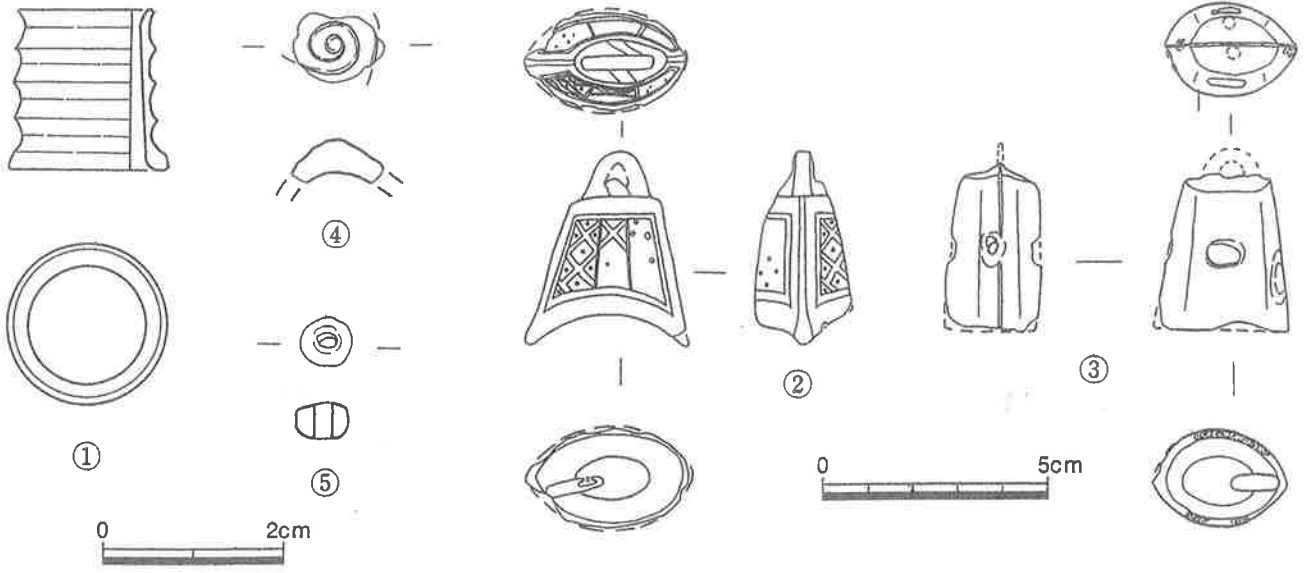
92.0m  
91.0m  
90.0m  
89.0m



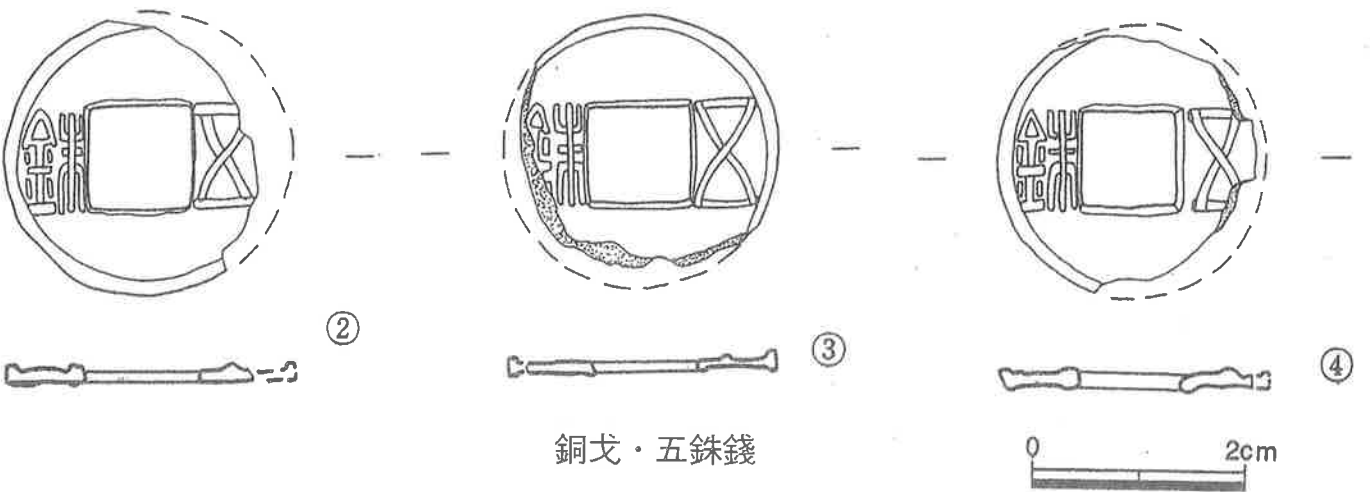
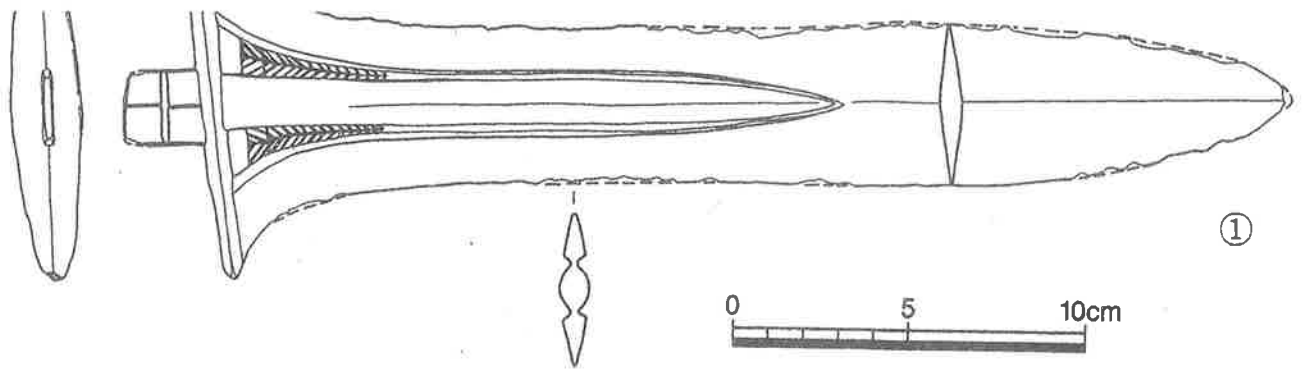
墓墳・埋没土堆積状況および木棺の位置 (点線)

西谷 正, 2008 「永川・靑龍田里遺跡が提起する問題」 『高麗美術館研究紀要』第6号

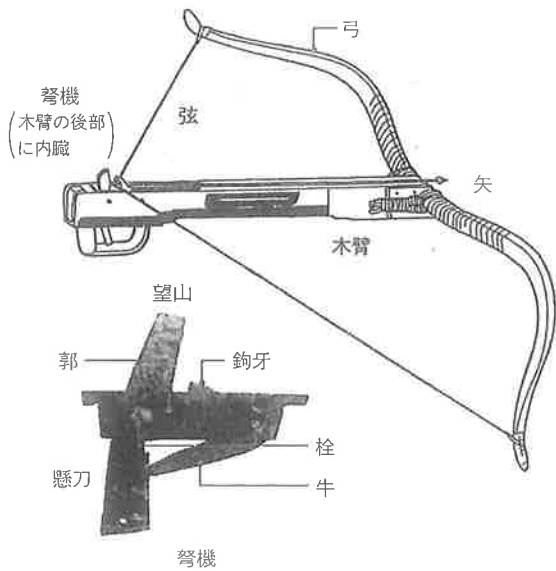
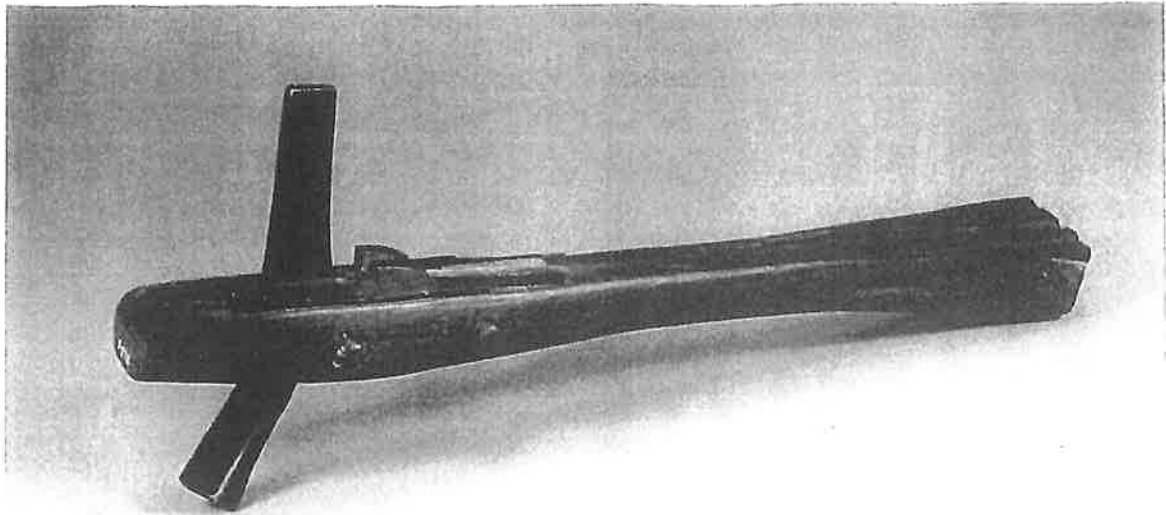




腰坑部出土遺物



銅戈·五銖錢



弩の各部名称 (太丸1994を一部改変)

ぼうざん  
望山 = 照準

こうが  
鉤牙 = ここに弦を引っかける。望山と一体。

けんとう  
懸刀 = 引き金

ぎゅう  
牛 = 懸刀を引くと脱落し、弦のかかった鉤牙が沈んで矢を射出。

かく  
郭 = 弩機の本体で四角い。望山・鉤牙・懸刀・牛をとめる。

せん  
栓 = 2本一組の青銅製目釘。1本は郭・望山・懸刀を、もう1本は郭・牛を木臂にとめる。

弩

「弩機」青銅製 「木臂」木製

長五四 幅四・四〇四・六

三国時代(呉)・黄武元年(二二二)

一九七二年、湖北省荊州市紀南城出土

湖北省博物館

横弓は欠失しているが、弩機に木臂をとまなつて出土した稀有な例である(木臂の現状は複製)。木臂は下面をくぼませて射撃時に左手で支えやすくしている。望山の後面は等間隔に目盛りを刻み、より正確な照準を図る。郭の上面に刻んだ銘は呉が魏から独立を宣言した黄武元年(二二二)に陳香という人物の工房でつくったことを伝える。陳香の二字は懸刀の片面にも刻む。また、懸刀と望山の片面に所有者の董嵩、部下で使用者の謝挙・陳奴の姓名を記す。製造者を表記する点は魏の弩(No.39)と共通するが、製造者が所属する官署は記さず、むしろ陳香という工匠の個人名ないしブランドを強調する。所有者と使用者を目立つ場所に明記する点も呉の弩にみられる特徴である。(川村)

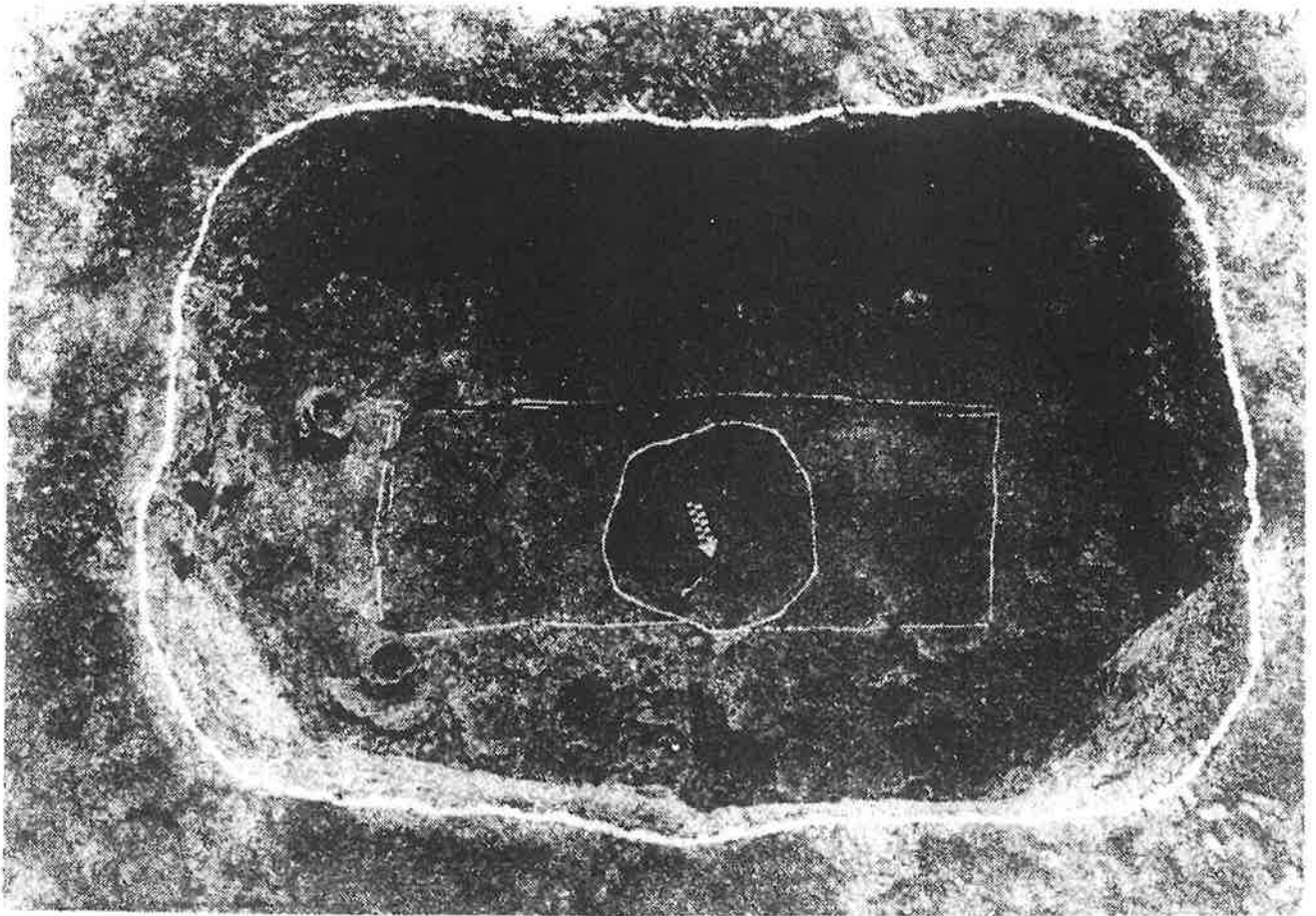
東京国立博物館・九州国立博物館、二〇一九年特別展 三国志



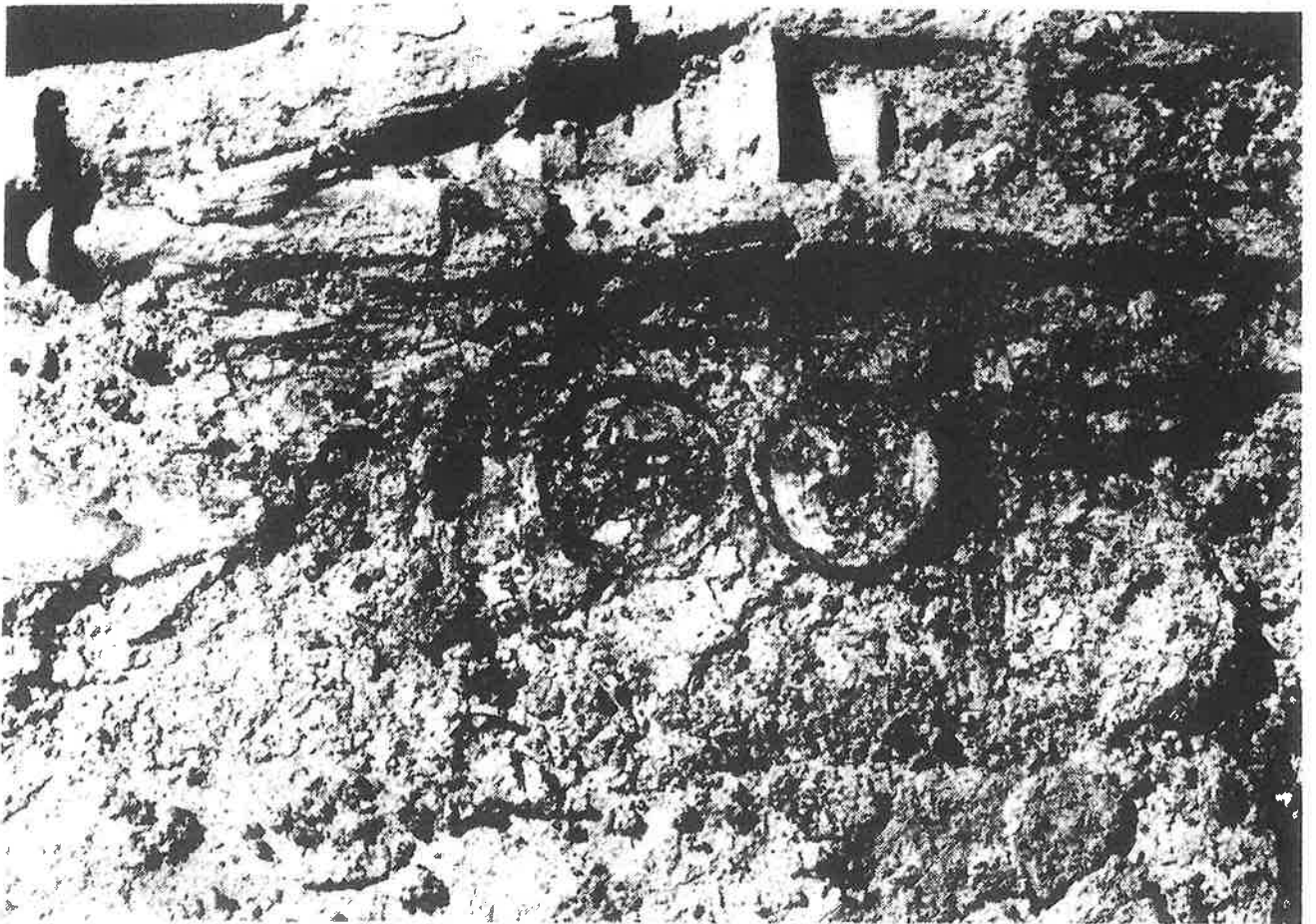
- 木槨墓
- 木槨墓
- 積石木槨墓
- 石槨墓
- 住居跡

—— 유적 조사 범위  
 --- 遺蹟 調査範圍  
 - - - 유적 식명 범위  
 - - - 遺蹟 命名範圍





130號墓 墓壙과 木棺사이의 遺物 露出狀態 및 요갱 露出狀態



130號墓 木棺內 倣製鏡 出土狀態

朴升圭, 1997 「慶州舍羅里遺蹟 130号墓에 대하여」 『新羅文化』 第 14 輯, 東國大學校新羅文化研究所

時期の、慶州を含む慶尙北道においても、同じような情勢にあったと類推したいが、いまのところ、論証できる段階ではない。

#### 四 高塚古墳の成立

ひとり朝鮮に限らず、墓制史上、死者を埋葬する場が、必要以上に壮大になる時期がある。高塚古墳の成立と発展がそれである。すなわち、首長とか豪族と呼ばれる支配者（権力者）層が、地上に古墳の墳丘を高く築き上げ、物量をもって被葬者の権威を誇示して、政治的記念物としていたのである。この場合、高塚古墳は、しばしば一般の民衆墓とは隔絶した現象として出現する。したがって、高塚古墳の成立は、国家の形成や王権の確立と無縁ではないといえよう。

慶州において、高塚古墳の成立に関する好資料が最近になって発掘された。上述の朝陽洞では、木槨墳が調査されたのである。これは、長さ四・五メートル、幅二・五メートルの墓壇のなかに木槨を組むという構造のようである。棺槨は遺存せず、また、封土もなくなっているが、もとは高塚古墳であつたらしい。副葬遺物には、土器と鉄器などがあつた。土器は、まだロクロを使用していないが、陶質である。その形態は、後の古新羅時代特有の硬質土器に直結するものである。鉄器は、矛・鏃など武器が主体をなしている。装身具

の水晶製切子玉は珍しい。調査者によると、この木槨墳の年代は二世紀ごろといわれる。しかし、つぎに出現する積石木槨墳の前段階という点と、『三国史記』では、味鄒尼師今二三年（二八四）に「大陵に葬った」となっていて、高塚古墳が考えられることなどの理由から、二〜三世紀、あるいは、四世紀のある時期までという年代幅をもたせておかざるをえない現状ではないだろうか。

もう一つは、朝陽洞のような高塚古墳の成立にかかわる評価の問題である。この段階をもって、慶州盆地のなかでの部族国家のレベルをこえた、部族連合体の盟主としての新羅国家の成長を想定することも可能である。

西谷 正、一九八〇『考古学資料よりみた朝鮮の国家形成』

—慶州の墓制を中心として— 『朝鮮史研究会論文集』第17集

形銅戈一、細形銅矛二、三、小銅鐔一、双鈴二、銅製品残欠、磨製石斧、ガラス玉、綿布残欠のほか、鉄製の環頭大刀一、斧四、鎌一、板状鉄斧三が発見された。これだけの豊富な副葬品を集中的に所有している被葬者は、九政洞だけである。そこに、前段階以上に、有力家族による勢力の集中化、換言すると、部族国家の成長がうかがえるのではなからうか。もつとも、慶州では、九政洞から西北方へ約一・七六キロのところにあたる朝陽洞でも、土墳墓が、一九七九年の七月から八月にかけて発掘調査された。朝陽洞の土墳墓は、長さ一・三メートルの垂直墳のなかに木棺を安置したものと推定されるが、黒陶長頸壺四、銅馬鈴二、多鈕鏡一、青銅劍把付鉄劍一などが出土した。また、九政洞から四、五キロ西北方へ行った坪洞でも、遺構は不明であるが、銅劍二、銅矛三、銅戈二が出土したり、ほかにも若干の銅利器を出土するところがある。朝陽洞の土墳墓は、その年代や九政洞との地理的に近距離という位置関係からみて、九政洞の土墳墓に系譜的につながると考えられるが、これらは、坪洞とは氏族を異にするものであろう。朝陽洞の出土品のうち、銅馬鈴や青銅劍把付鉄劍は、楽浪郡の王根墓の出土遺物に酷似するといわれるので、朝陽洞土墳墓の年代は、前漢末に併行する時期、すなわち、紀元前後に比定される。これらを合わせ考えると、紀元前後の段階においても、九政洞を頂点としつつも、さらに数群

の有力家族(集落)から構成される支配共同体に統率された部族国家であったかもしれない。ただ、支石墓の時代と異なる点も指摘できる。というのは、九政洞の遺物のなかには、ガラス玉があったり、鉄器の型式にも楽浪郡関係遺跡出土の漢式遺物と共通性が認められる。朝陽洞でも、銅馬鈴や青銅劍把付鉄劍は、楽浪郡の王根墓の出土品に酷似するといわれることはいま触れたとおりである。そうした、慶州における土墳墓にみる漢式遺物は、九政洞を頂点に戴く慶州の部族国家が、楽浪郡との間に朝貢関係を結び、その結果、漢式遺物が地域社会にもたらされた、という当時の情勢を示していると考ええる。

こうした状況は、後漢初に併行する西暦一世紀以後も継続したと思われる。この時期の遺跡は、慶州においてははまだ発見されていないが、金海平野の慶尚南道金海郡酒村面良洞里<sup>(8)</sup>では、銅製劍把頭一、鉄劍二、鉄矛二、銅製流雲文縁方格規矩四神鏡一、土器三が伴出した。銅鏡は、おそらく後漢製であろう。

一世紀以後、三世紀ごろにかけて、つまり、原三国時代には、慶尚南道の海岸地帯では、鉄鏃・骨鏃などの武器が異常に発達し、また、海拔一〇〇メートルをこえる高所に、防禦村落が少なからず営なまれている。この現象は、部族間の緊張状態を反映するものであり、その間、部族連合が進展したのではないかと推測している。同



けのかんたんな土壙墓が一般であったと推定される。ところが、集落内部に有力階層が出現すると、その家族は、支石墓を築造したらしい。慶州では、支石墓はいずれも碁盤式（南方式）を呈するが、それらが慶州盆地の随所に分布している。支石墓は、少ないところで二、三基、多いところでは二〇数基が群在している。そのうちには、蓋石の長さ四メートル、幅二メートル、厚さ一・五メートルにもなる巨大なものもある。<sup>(2)</sup>

そのような集落遺跡や支石墓群からなる単位は、氏族と推測されるが、それらを見ると、相互の規模に大小があり、多様である。無文土器時代のある時期から、農業生産の進展に伴って、集落間に不均等な発展が生じると、強力な集落は、他の弱小集落を併合することもあったろう。慶州において、そのような相対的に顕著な存在として成長してくる有力な集落を具体的に呈示はできない。ただ、慶尚南道の金海平野における同時期の遺跡群に例をとると、数個所に散在する支石墓群のなかには、ある特定の支石墓群においてのみ、顕著な副葬品をもつもの<sup>(3)</sup>が出現しており、慶州を考える場合の、参考にすることができる。つまり、同じような状況が慶州においても発生していたと類推する。その場合、有力家族に率いられた有力集落は、一つとは限らず、二つ以上の複数であることも予測される。ここにおいて、一つ、いな、複数の有力な家族もしくは集

落、いかえれば、それらによって構成された支配共同体<sup>(4)</sup>の成立と、その支配共同体によって統率される部族国家の形成を想定したのである。その契機をなしたのは、水稻耕作を基軸に、水系の共同利用や、新しい耕作地の開墾などに、一つの集落ないし氏族の枠をこえた、いくつかの集落（氏族）群の地縁的結合であったろう。そして、それは、遺構や遺物からみて、紀元前数世紀のことであると思われる。

### 三 「土壙墓」の出現

無文土器時代について原三国時代に入ると、墓制においては、支石墓に代わって、いわゆる「土壙墓」が出現する。ここで「土壙墓」というのは、文字どおり、地下に墓壙を掘っただけの土壙墓ではない。遺存状態は土壙墓のようであっても、墓壙のなかに、もと、木棺や木槨があった可能性があり、事実、それらが確認される場合もあって、それらを総合して「土壙墓」と呼ぶことにする。この節で、以下、土壙墓と書くことにするが、それには、いま述べたような意味を含んでいる。

さて、慶州盆地における土壙墓は、慶州市九政洞<sup>(5)</sup>の遺跡にその実例をみることができる。ここでは、土壙墓の構造は明らかにされていないが、一種の豎壙（土壙）のなかから、細形銅劍一と二、中細

# 考古学資料よりみた朝鮮の国家形成

——慶州の墓制を中心として——

西谷 正

## 一 はじめに

最初に断っておかねばならないことは、考古学独自の資料にもとづいて、国家の形成過程や政治構造といった種類の問題を議論することは、きわめて困難な作業であるという点である。ただ、考古学的諸現象の分析を通じて、歴史過程の画期を設定し、そのことを、国家の形成と関連づけて論議することは可能である。朝鮮における国家の形成は、三国時代に大きく展開する。その三国時代に関しては、『三國史記』や『三國遺事』といった文献史料があるので、問題として取り上げる考古学資料と直接の係わりをもつものについては、文献史料を、適宜、参照することは許されるであろう。

また、考古学資料から朝鮮の国家形成に言及した、研究の蓄積

や、そうした観点からの資料の追求もほとんどみられない。このような現状に照らして、王都が千年近い長期間にわたり、一個所に継続した新羅では、ことに墓制資料が比較的恵まれているので、ここでは、慶州の墓制を素材として、新羅における国家形成の問題を考えるための、準備作業を試みることにする。

## 一一 支石墓の時代

新羅の旧都、慶尚北道の慶州盆地をみると、その平野部や山麓地帯には、無文土器時代（青銅器時代）の遺跡が少なからず認められる。そこでは、無文土器とともに、太形石斧・柱状抉入石斧・環状石斧・石庖丁・石剣・石鏃といった各種の磨製石器が採集されている。<sup>(1)</sup> それらの遺物を残した住民の墳墓の大多数は、墓壙を掘っただ